

The "Islamization" of Istanbul and the conversion "churches" into mosques : focusing on the timing of diversion to mosques

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澤井, 一彰 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24089

特集 中近世の東地中海世界における諸民族の混交

イスタンブルの「イスラーム化」と 「教会」のモスクへの転用 ——モスク転用の時期の分析を中心に——

澤 井 一 彰

はじめに

- I. モスクに転用された「教会」とその関連施設
- II. 転用が実施された時期とイスタンブルの「イスラーム化」

おわりに

はじめに

イスタンブルはオスマン朝に征服された1453年以來、徐々に都市機能が整備されつつ、長らくその帝都としてムスリムとキリスト教徒あるいはユダヤ教徒との文化的共生の舞台となってきた。オスマン朝はまた、基本的にはシャリーア（イスラーム法）を支配の根幹に据えつつも、その柔軟な運用や、非ムスリム宗派共同体への一定の「自治」の許容を通じて、文化的軋轢やそれに起因するような都市暴動の回避にも努めてきた。こうしたオスマン朝における多文化共生のあり方は、三大陸に跨る広大な領域を620年以上の長きにわたって支配し続けることができた要因の一つであると一般的には理解されている。

しかし、その一方で近年、17世紀中葉のイスタンブルにおいては、とくに1660年に発生した大火からの復興の過程を通じてオスマン朝政府が主導するかたちでの都市の「イスラーム化」(Islamization)が進められたという議論が行われている(Baer 2004)。マーク・デイヴィット・ベアー Marc David Baer によってなされたこの主張は、関連する著作(Baer 2008)が2008年に北米中東学会によってアルバート・ホーラーニー賞 Albert Hourani Book Award を授与されていることから、トルコ共和国と並んでオスマン朝史研究を牽引してきたアメリカの学界においては、少なくとも一定の評価を得ていると考えられる。

これに対して、アブデェルカーディル・オズジャン Abdülkadir Özcan やケナン・ユルドゥズ Kenan Yıldız といったトルコ人研究者たちは、多くの一次史料の記述に依拠しつつ、実証的なレベルにおいて厳しい反論を行ってきた(Özcan 2011)(Yıldız 2012)(Yıldız 2014)

(Yıldız 2017)。著者もまた別稿において、対立する双方の見解を同時代史料に基づいて検証した上で、ベアーのいう「イスラーム化」は、少なくともイスタンブルという都市全体で見られた傾向とは言えず、オスマン朝政府はその都市運営に際して、非ムスリム臣民に対しても一定の配慮を行っていたという結論を下した(澤井 2018)。

ただし、このような「イスラーム化」についての議論とは別に、オスマン朝支配下のイスタンブルにおいては、少なくない数の教会をはじめとするビザンツ帝国期の宗教施設が、モスクへと転用されたことが広く知られている。キリスト教徒にとって極めて重要な施設である教会をイスラームの礼拝所であるモスクに変えるというこうした行為は、ある意味において「イスラーム化」を最も象徴する出来事であるようにも捉えられよう。そのため、こうした転用の事例を仔細に検討し、その時期や要因をあきらかにすることは、すなわち上で述べたイスタンブルにおける「イスラーム化」についての議論を別の観点から再考するための、ひとつの重要な指標を提供し得るのではなからうか。本稿は以上のような問題意識に基づき、オスマン朝期のイスタンブルにおいてモスクに転用された「教会」やその関連施設に注目しつつ、その時期や経緯についてあらためて考察するものである⁽¹⁾。

I. モスクに転用された「教会」とその関連施設

ビザンツ帝国とオスマン朝にかかわる建築史と美術史という複数の研究分野において長らく学界に大きな貢献を行ってきた泰斗、故セマーヴィー・エイジェ Semavi Eyiceによると、イスタンブルにおいてモスクに転用された教会やその関連施設の数はおおよそ 40 に上るといふ(Eyice 1990)⁽²⁾。周知のように、非常に有名なところでは、長きにわたってコンスタンティノポリスにおける最大の聖堂として都市の中心部に屹立してきたハギア・ソフィア(Ἁγία Σοφία アヤソフィア)をはじめ、多くの教会がオスマン朝による征服の直後から、段階的かつ政策的にモスクへと転用されてきた。

ただし、上記のエイジェを含めた先行研究においても指摘されているように、オスマン朝治下のイスタンブルにおいてモスクへと転用された建築物は、かならずしも「教会」だけではなかった。具体的には後で詳しく検討するが、元来は古代ローマ帝国末期の墓廟や

⁽¹⁾ この小論はまた、2019年度の夏に実施を予定している申請中の科研費によるイスタンブル調査を準備するための予備的考察としての性格も有していることを付記しておく。

⁽²⁾ おそらく講演記録であると考えられる(Semavi 1990)には、その冒頭で「だいたい 40 ほどの」(aşağı yukarı 40 kadar)という表現がなされている。ただし、実際にエイジェが同論文で言及しているのは 38 の建築物に留まる。本稿では、これにアヤソフィアとガラタ地区にあるアラブ・モスクを加えた合計 40 の建物について検討していく。

図書館であったと考えられている施設、あるいは建設当初は教会であったものの、オスマン朝による征服の時点においては、すでに廃墟となっていた可能性が高い建物の遺構なども含まれているという。本稿においては、こうした建築物についても先行研究に倣って「教会」として分析の対象とする。しかし、仮にかつて教会とされていた廃墟をオスマン朝政府ないしは、その高官がモスクとして活用したとしても、それが直接にイスタンブルの「イスラーム化」の議論とは結びつかないことは言うまでもない。

いずれにせよ、ビザンツ期から残された合計で 40 を数える建築物が、オスマン朝治下において破壊されたのではなく、モスクに姿を変えて再び利用され続けたという事実は非常に興味深い。以下においては、それぞれの建物が、いつ、またどのような理由によってモスクへと転用されたのかを順を追いつつ、可能な限りあきらかにしていきたい。その際には、H.1182-93 (1768-79) 年に編纂され 800 以上のモスクについての情報を記載した、イスタンブルにおける「モスク尽くし」とも言うべきアイヴァンサライー・ヒュセイイン・エフェンディ (Ayvansarayı Hüseyin Efendi, d.1787 年)⁽³⁾ の『モスクの花園』(*Hadikatü'l-Cevâmi'*) を主要史料として用いる。さらに、前述のエイジェをはじめとする建築史や美術史の分野における先行研究も必要に応じて参照しながら、まずはモスクとされたそれぞれの「教会」について、転用後の名称のラテンアルファベット順に従って網羅的に概観していきたい⁽⁴⁾。なお、建築物の一部については著者が撮影した写真を添付した。

1. アジェム・アー・モスク *Acem Ağa Mescidi*⁽⁵⁾ (*Lala Hayreddin Mescidi*)

5 世紀の中頃に、現在はアヤソフィアが建てられている場所の約 100 m 西方に建設された聖母マリア教会 *Theotokon ton Khalkoprteion* を母体とする。同所には、それ以前にはシナゴグが存在していたとされる。教会の完成後、アヤ・イリニ *Aya İrini* 教会やアヤソフィアが建設された際には、総主教座としての役割も果たしていた。しかし、1453 年にオス

⁽³⁾ 著者であるアイヴァンサライー・ヒュセイイン・エフェンディ自身については、十分な情報が存在しない。その綽名からイスタンブルのアイヴァンサライ地区の出身であると考えられる。彼は生前、同地区にあって本稿でも考察対象とするトクル・デデ・モスクの導師 *imam* として活動しており、同時にイエニチェリの構成員でもあったことが知られている (Ayvansarayı 2000) (Eyice 1998)。

⁽⁴⁾ きわめて大部の史料である『モスクの花園』は、完成後に清書されたが、一連の作業が最終的に完了したのは、H.1195 (1781) 年のことであったという (Eyice 1998, 528)。本稿では、もっとも信頼できる研究であり史料の英訳でもある (Ayvansarayı 2000) を主に利用し、必要に応じてトルコで出版された (Ayvansarayı 2001) も参照した。

⁽⁵⁾ 周知のようにモスクとは、アラビア語で礼拝所 (より正確には「平伏する場所」) を意味する *masjid* に由来する英語 *mosque* を、カタカナ表記したものである (羽田 2002)。オスマン朝においては、金曜日の集団礼拝が行われる比較的規模の大きなモスクをジャーミー *cami*、規模が小さなモスクのことを *masjid* から転じた *mescit* と呼ぶことが多い。ただし、その定義は明確ではなく、また特に *mescit* については、人や時代が異なるとジャーミーと呼ばれたりすることもある。本稿においては便宜上、双方の意味を併せ持つ「モスク」を用いることにしておきたい。

マン朝君主であるメフメト2世 (Mehmed II, d.1481年) によってコンスタンティノポリスが征服された際には、ほとんど原型を留めないほどに荒廃していたとされる。後年、わずかに残されていた後陣と北側の壁を再利用するかたちで、大麦管理官 Arpa Emini の職にあったララ・ハイレットイン Lala Hayreddin という人物によってモスクとされたという。『モスクの花園』によると、H.889 (1484/85) 年が、モスクが建立された年にあたる。ただし、現存する記録としては、H.891 Zilhicce (1486年12月) 付のワクフ文書が最古のものとなる。トルコ共和国が建国された後の1936年にワクフ局によって解体され、モスクとしての役割を終えた⁽⁶⁾。現在は、再び廢墟に近い状態となっている。

2. アラバジュ・バイエズイト・モスク Arabacı Bayezid Mescidi

イスタンブルの西方に聳え立つ大城壁のスィリヴリ門 Silivri Kapısı の内側に建っていたとされる。荷車 araba にかかわる職業あるいは官職についていたバイエズイト Bayezid という名の人物によってビザンツ期の教会が転用されたものと考えられるが、教会の名称やモスクにされた時期については不明である⁽⁷⁾。ただし、1546年付の『ワクフ調査台帳』(Vakıflar Tahrir Defteri) には記載があるため、それ以前にモスクとされていたことは確実である。19世紀中頃に技術学校 Mühendinhane の学生たちによって作成され、H.1264(1848)年に出版された地図には名称が存在し、1880年頃に作成された地図にはその名が見られないことから、19世紀の第三四半期に荒廃したと考えられる。跡地は、薪置き場として利用されているが、この地域の街区の名称としては現在もその名を留めている⁽⁸⁾。

3. アティク・ムスタファ・パシャ・モスク Atik Mustafa Paşa Camii

イスタンブルの大城壁が金角湾に達する北端のアイヴァンサライ Ayvansaray 地区にある。おそらくは、ビザンツ皇帝テオフィロス (Θεόφιλος, d.842年) の皇女テクラ (Θέκλα, d.867年頃) によって建設された教会と修道院に由来する可能性が高いとされるが、詳細は不明である。オスマン朝によるコンスタンティノポリスの征服から37年が経過した1490年に、後に大宰相となるコジャ・ムスタファ・パシャ (Koca Mustafa Paşa, d.1512年) によって、モスクとされた。敷地内には、1922年に考古学博物館 Arkeoloji Müzesi に移送されるまで

⁽⁶⁾ (Ayvansarayı 2000, 165) (Eyice 1990, 288) (Eyice 1994 (a)) (Müller-Wiener 1998, 76f.)

⁽⁷⁾ バイエズイトについては、綽名以外には生没年も含めて何も分からない。綽名についても、多くの政敵を流罪や死罪とするために馬車 araba を送り込み、最終的には自らも馬車によって流刑とされた大宰相アラバジュ・アリ・パシャ (Arabacı Ali Paşa, d.1693年) のように、職業や官職ではなく特定のエピソードに由来する可能性もある (Özcan 1989)。

⁽⁸⁾ (Ayvansarayı 2000, 162) (Eyice 1990, 290) (Eyice 1994 (b))

大理石の洗礼台が置かれていたほか、真偽のほどは不明ながら、民間伝承としてムハンマドの教友でウマイヤ朝期のイスタンブル攻囲戦において戦死したと信じられているジャービル・ビン・アブドゥッラー (Jabir bin Abdullah, d.697年) の墓が現在も並置されていることから、ジャービル・モスク Cabir Camii と呼ばれることもある⁽⁹⁾。

4. アラブ・モスク Arap Camii

金角湾の北岸に位置するベイオール区 Beyoğlu Belediyesi のガラタ Galata 地区に現存する建築物である。大城壁内の地域を意味する狭義のイスタンブルに含まれないためか、あるいは『モスクの花園』において教会から転用されたものではなく、後述の逸話に基づいてウマイヤ朝期のモスクとして紹介されているためか、先行研究では言及されていない。19世紀初頭の修復の際に掲げられた碑文に刻まれている伝承、すなわちウマイヤ朝期に実施された7世紀初頭のコンスタンティノポリス攻囲戦の最中に包囲軍によって同モスクが建設されたという伝説は史実ではない。また、ビザンツ帝国がコンスタンティノポリスに居住するムスリムのために建設を許可したとされる市内最古のモスクについては、大城壁の内側に存在していたと考えられるため、やはりこれとは別の建物である。第四回十字軍の結果として成立したラテン帝国の統治期であった13世紀前半において、カトリック教会である聖パウロ San Paolo 教会として建設されたとされるが、後にドメニコ修道会の手によって聖ドメニコ San Domenico 教会となったという。コンスタンティノポリスの征服から20年以上が経過した1475年頃に、メフメト2世によってモスクに転用されたと考えられる。当初は、所在地の名称からガラタ・モスク Galata Camii と呼ばれたが、1492年にイベリア半島でレコンキスタが完了し、「難民化」した多くのムスリムが滅亡したナスル朝からイスタンブルに流入してこの付近に集住したことから「アラブ(人)」を意味するアラブ・モスクと呼ばれるようになった。1731年に発生したガラタ火災の後も含めて、数度にわたる修復を経て、現在も同地区のモスクとして利用されている⁽¹⁰⁾。

5. アヤソフィア Ayasofya

ビザンツ建築の金字塔として知られる現在のアヤソフィアは3代目のものである。初代のアヤソフィアは、伝説によるとコンスタンティノポリスに都を定めたコンスタンティヌス1世 (Constantinus I, d.337年) に帰されているが、実際にはその息子コンスタンティウ

⁽⁹⁾ (Ayvansarayi 2000, 186) (Eyice 1990, 281) (Eyice 1994 (c)) (Müller-Wiener 1998, 82f.) (Mathews 1976, 15-22)

⁽¹⁰⁾ (Ayvansarayi 2000, 355-357) (Eyice 1991) (Müller-Wiener 1998, 79f.) (Mathews 1976, 15-22)

ス2世 (Constantius II, d.361年) が360年に建設させたものであるとされる。その後、404年に騒乱によって一部が焼け、415年にイスタンブルの大城壁の建設者としても知られるテオドシウス2世 (Teodosius II, d.450年) によって再建された。しかし2代目のアヤソフィアもまた、ユスティニアヌス1世 (Justinianus I, d.565年) の時代の都市暴動であるニカの乱によって532年に再び焼失した。現在のアヤソフィアは、この後の537年にユスティニアヌス1世によって再々建されたものである。アヤソフィアは、その後も数度の地震や火災によって被害を受けながらも、ラテン帝国による短い支配期を除けば、1453年まで総主教座としての機能を保持し続けた。

オスマン朝によってコンスタンティノポリスが征服された直後、メフメト2世はアヤソフィアに入り、そこで最初の礼拝を行ったとされる。この時、都市で最大の規模を誇ったアヤソフィアは、他の占領地でも行われていたように「征服の証し」として、教会からモスクへと転換された。この時、総主教座はメフメト2世の綽名である「征服者 Fatih」が冠されたファーティフ・モスク Fatih Camii が建っている場所に当時あった聖アポストロイ Agioi Apostoloi 教会に移された。ただし、かなり後の1481年になってようやく付設されたとされるモスクの象徴とも言うべきミナーレ (光塔 minare) は南西角の1本のみであり、また木製の極めて小規模なものであったという。次のバイエズイト2世 (Bayezid II, d.1512年) の時代には北東角に別の1本のミナーレが追加されたが、これも1509年の大地震で崩壊したとされる⁽¹¹⁾。

後に、セリム2世 (Selim II, d.1574年) は建築家スイナン (Mimar Sinan, d.1588年) に命じてアヤソフィアの大改修とミナーレの追加を行わせた。ただし、これらが完成したのは、次のムラト3世 (Murad III, d.1595年) の治世であった。セリム2世以降のオスマン朝の君主たちはまた、自らの名を冠したモスクをイスタンブルに建設させなかったこともあって、アヤソフィアの敷地内を自らの墓廟の場所とした。例えばセリム2世自身と、その息子で前述のムラト3世、さらにムラト3世の息子で後継者のメフメト3世 (Mehmed III, d.1603年) の墓廟は、いずれもアヤソフィアに存在している。さらに17世紀中葉には、ムスタファ1世 (Mustafa I, d.1639年) とイブラヒム (İbrahim, d.1648年) もまた同じ敷地内に埋葬された。

トルコ共和国が建国された後の1934年、アヤソフィアは初代大統領ムスタファ・ケマル・アタテュルク (Mustafa Kemal Atatürk, d.1938年) の命によって博物館とされることが決定

⁽¹¹⁾ (Eyice 1994 (d)) ただし、アヤソフィアの各ミナーレの建築年代には研究者の間で議論がある。例えば、クレインによると2本目のミナーレもバイエズイト2世ではなく、メフメト2世期にはすでに建設されていたという (Ayvansarayi 2000, 6-10)。

され、翌年には一般に向けて公開された。一方で、アヤソフィアをモスクに戻そうとする議論も長らく存在しており、近年こうした流れを受けて建物の一部では礼拝が可能となったほか、2016年には政府によってアヤソフィアに常駐する導師も任命されている⁽¹²⁾。



6. バラバン・アー・モスク Balaban Ağa Mescidi

かつて、ファーティフ区 Fatih Belediyesi のラーレリ Laleli 地区にあったとされる、ビザンツ帝国あるいは古代ローマ帝国後期の小規模な建築物と考えられる。元の外観は円形、内観は六角形という特異な形態であることから、図書館であったのではないかとも思われるが、エイジェによると古代ローマ帝国後期の墓廟であった可能性が高いという。また、いずれに起源をもつにせよ、後に小さな礼拝堂（チャペル）に改装されたとされる。バラバン・アー・モスクという名称から、15世紀後半にオスマン朝に反旗を翻したスカンデル・ベク（Skander Beg, d.1468年）と戦ってアルバニアで戦死したバラバン・パシャ（Balaban Paşa, d.1466年）が、まだイエニチェリのセクバンバシユ Sekbanbaşı であったイスタンブール征服の当時にモスクとしたのではないかと考えられる一方で、記録に残る最古のワク

⁽¹²⁾ (Ayvansarayı 2000, 6-10) (Eyice 1994 (d)) (Müller-Wiener 1998, 84-97) (Mathews 1976, 262-312)

フ文書の日付がバラバン・パシヤ死後の H.888 Safer (1483 年 3 月) のものであるため、同名の別人による可能性も否定できない。バラバン・アー・モスクはトルコ共和国初期の 1930 年に撤去され、残念ながら現在は跡形も残されていない⁽¹³⁾。

7. バルトハーネ・モスク **Baruthane Mescidi**

かつて、大城壁のメヴレヴィーハーネ門 *Mevlevihane Kapısı* の内側のシェフレミニ *Şehremini* 地区にあったとされる建物である。現在は、その痕跡すら残されていないために、正確な位置の特定さえも困難となっている。その名称から、メフメト 4 世 (Mehmed IV, d.1693 年) の時代に同地域に建設された火薬工房 *Baruthane* に付属するモスクであったと考えられるが、母体となった教会の名前や来歴、形状などは一切不明である。この火薬工房は H.1194 (1782) 年に破却されたが、モスク自体は当時の大宰相ハリル・ハミト・パシヤ (Halil Hamid Paşa, d.1785 年) によって再建されたという。ただし、その後、時期や理由は明確ではないものの、モスクは放棄されたものと考えられる⁽¹⁴⁾。

8. ボドルム・モスク **Bodrum Camii (Mesih Paşa Camii)**

ファーティフ区のラーレリ地区に現存する建築物である。920 年に、同じ場所にあったとされる宮殿の一角にミレライオン *Myrelaion* 修道院の墳墓付き教会として皇帝ロマノス 1 世 (Ρωμανός Α', d.948 年) によって建設された。コンスタンティノポリスの征服後、とりわけバイエズイト 2 世期に、廃墟となった教会などを活用したかたちで頻繁に実施されたイスタンブルにおける市街地の「活性化政策」(*şenlendirme politikası*) の一環として、大宰相であったメスイフ・アリ・パシヤ (Mesih Ali Paşa, d.1501 年)⁽¹⁵⁾ によってモスクに転用された。転用の時期については、『モスクの花園』に H.907 (1501) 年と明記されているほか、メスイフ・アリ・パシヤ自身がガラタ地区で発生した火災の消火活動に際してこの年に殉職していること、H.907 *Rebiyülevvel* (1501 年 9/10 月) 付のワクフ文書が存在することから、同年に間違いないと考えられる。このモスクは、建物の地下に貯水池を有し

⁽¹³⁾ (Ayvansarayi 2000, 69) (Eyice 1990, 289) (Eyice1994 (e)) (Müller-Wiener 1998, 98f.) (Mathews 1976, 25-27)

⁽¹⁴⁾ ただし、クレインは大宰相ハリル・ハミト・パシヤをハリル・ハドゥム・パシヤ *Halil Hadim Paşa* と誤記している (Ayvansarayi 2000, xxvii)。 (Eyice 1990, 290)

⁽¹⁵⁾ メスイフ・アリ・パシヤは、最後のビザンツ皇帝であるコンスタンティノス 11 世 (Κωνσταντίνος ΙΑ', d.1453 年) の甥にあたる人物である。また母方では、ヴェネツィアの有力貴族であるコンタリーニ *Contarini* 家にも連なる。ビザンツ帝国の滅亡後にイスラームに改宗し、兄弟であるハス・ムラト・パシヤ (*Has Murad Paşa*, d.1475 年頃) とともにオスマン朝に仕えて、バイエズイト 2 世期には数度にわたって大宰相職を務めた (Kiel 2004)。

ていたことから、地下室を意味するボドルムと呼ばれたと考えられる。ただし、旧来の名称も 16 世紀後半頃までは通用していたことがイスタンブルを訪れたペトルス・ギリウス (Petrus Gyllius, d.1555 年) によって伝えられている⁽¹⁶⁾。同モスクは、イスタンブルで頻発した都市火災の被害にたびたび遭いながらも修復され、現在はビルの谷間に取り残されて外部からは見えにくくなってしまったものの、今もモスクとしての機能を果たしている⁽¹⁷⁾。



9. エスキ・イマーレト・モスク Eski İmaret Camii (Kilise Camii)

ファーティフ区のファーティフ Fatih 地区にある金角湾を見下ろす高台に現存する。アレクシオス 1 世 (Αλέξιος Α', d.1118 年) の母、アンナ・コムネナ (Αννα Κομνηνή, d.1153 年) によって息子が在位中の 1081~87 年にかけて建設されたパンテポプテス Pantepoptes 修道

⁽¹⁶⁾ 筆名はラテン語読みであるが、本名はピエール・ジル Pierre Gilles というフランス人である。フランス国王フランソワ 1 世 (François I, d.1547 年) に命じられて古典的遺物の調査のために 1544~47 年の間にイスタンブルに滞在した。その成果は、いわゆる『コンスタンティノポリス地誌』(De Topographia Constantinopoleos et de illius antiquitatibus libri IV.) と名付けられた著書に結実し、同書は現在においてもイスタンブルについてのトポグラフィを記した名著のひとつに数えられている (Gyllius 1997)。

⁽¹⁷⁾ (Ayvansarayi 2000, 70) (Eyice 1990, 282) (Eyice1994 (f)) (Müller-Wiener 1998, 103-105) (Mathews 1976, 209-219)

院の教会を母体とする。コンスタンティノポリスの征服から 10 年を経た 1463 年以降に、メフメト 2 世モスク複合施設群 Fatih Külliyesi の完成までイマーレトとして用いられ、救貧施設 imaert のほか、修道場 zaviye やイスラーム学院 medrese としての機能も持ち合わせていた。1470 年に上記の複合施設群が完成した後に、モスクに転用されたと考えられる。共和国期の 1954 年には、私立のクルアーン学校の生徒のために寄宿舎として用いられていたが、1970 年代に修復がなされ、現在は再びモスクとして利用されている⁽¹⁸⁾。

10. エトイエメズ修道場モスク Etyemez Tekkesi Mescidi (Mirza Baba Tekkesi)

かつて、サマトヤ Samatya 地区にあったとされるイスラーム神秘主義教団の修道場である。『モスクの花園』によると、名称などは一切不明である教会が H.886 (1481/82) 年にオメル・アル＝ブハーリー Ömer al-Buhari の息子であるシェイフ・ミールザー・ババ Şeyh Mirza Baba というデルヴィシュ derviş に与えられて修道場に転用されたものであるという。オメルはその綽名から中央アジアのブハラ出身者のスーフィーであると考えられ、息子のミールザーは、コンスタンティノポリス攻囲戦にも参加していたとされる。この修道場が、当初いかなる神秘主義教団に属しており、どのような活動を行っていたのかは不明である。ただしその後、修道場はサァディー Sa'di 教団に属するフルースイー・エフェンディ (Hulusi Efendi, d.1783 年) によって「再興」され、トルコ共和国初期の 1925 年に神秘主義教団の活動禁止と修道場の閉鎖が決定されるまで、同教団のイスタンブルにおける拠点として繁栄した。閉鎖後は長らく放置されていたが、1950 年代には公共化されて建物は撤去され、跡地には社会保険機構によって労働者のための病院が建設されて、現在に至っている。「肉を食べない etyemez」という不可思議な名称の来歴は定かではないが、修道場の中興の祖とも言うべきフルースイー・エフェンディの家系をあらわすエトイエメズザーデ Etyemezzade に由来する可能性が高いと考えられる⁽¹⁹⁾。

11. フェナーリー・イーサー・モスク Fenari İsa Camii

907 年に、古代ローマ帝国後期の墓地があった場所に皇帝レオン 6 世 (Λέων ΣΤ', d.912 年)

⁽¹⁸⁾ (Ayvansarayı 2000, 36) (Eyice 1990, 283f.) (Eyice 1994 (g)) (Müller-Wiener 1998, 120f.) (Mathews 1976, 59-70)

⁽¹⁹⁾ (Eyice 1990, 290) エトイエメズ・モスクについてクレインは、パイェズィディ・ジャディード・モスク Bayezid-i Cedid Mescidi とも呼ばれるとし、このモスク自体は見る影もないほどに改修されつつも付近に現存していると述べる (Ayvansarayı 2000, 36)。しかし、おそらく後者のモスクは、修道場に後世に付属されたモスクであり、本稿で考察する教会を母体とする建築物とは無関係であると考えられる (Tanman 1994 (b))。

時代の海軍提督であったコンスタンティノス・リプス (Κωνσταντίνος Λίψ, d.917年) によって建設されたとされる建築物である。聖母マリア Theotokos に捧げられたことから献堂者の名前と合わせて、テオトコス・トゥ・リボス Theotokos tou Libos 修道院と名付けられたこの建物は、コンスタンティノポリスの征服後、前述のボドルム・モスクと同様にバイエズイト2世期に実施された都市の「活性化政策」の一環として、おそらく廃墟かそれに近い状態であったところをモスクとされたと考えられている。モスクへの転換を主導したのは、当時の有力ウラマー (ulema イスラーム知識人) 家系であったフェナーリー家出身でルメリ・カズスケリ Rumeli Kazaskeri の要職についていたフェナーリーザーデ・アラエツディン・アリ・エフェンディ (Fenarizade Alaeddin Ali Efendi, d.1497年) であったため、現在もこの名で呼ばれている。転用の正確な年代は不明であるが、前述の人物が死去した1497年よりも前であることは確実である。その後は、1633年や1918年に発生したイスタンブール大火によって何度も被害を受けたものの修復され、今もワタン大通り Vatan Caddesi に面した場所でモスクとして存続している⁽²⁰⁾。

12. フェティイエ・モスク Fethiye Camii

ファーティフ区のチャルシャンバ Çarşamba 地区にある金角湾を望む斜面に今も立つ建物である。この場所には、現在は失われてしまったとされる碑文の記述から、11世紀後半から12世紀初頭に建てられた教会があったことが知られる。現在の建物は、おそらく第四回十字軍で被害を受けたと思われる前者の上に、パンマカリストス Pammakaristos 修道院の教会として13世紀の末、遅くとも1293年までには建設されたと考えられている。コンスタンティノポリスの征服後も、しばらくは女子修道院として用いられていたが、アヤソフィアから聖アポストロイ教会に移されていた総主教座が1455年前後にこの教会へと移されたことによって、その後の約150年間にわたって新たな総主教座としての役割を果たした。しかし、周辺街区の住民の大多数を徐々にムスリムが占めるようになったとされるムラト3世の治世において、『モスクの花園』によると H.1000 (1590/91) 年に対サファヴィー朝遠征によるグルジアとアゼルバイジャンの征服を記念して「征服 fethiye」と名付けられたモスクへと転換された。共和国建国後は、1936～38年にかけて修復が行われたが、その際にモスクを管轄するワクフ局から博物館局へと移管され、しかし博物館とされるわけでもなく長らく閉鎖されていた。その後の1960年代に周辺住民の請願によって再びモ

⁽²⁰⁾ (Ayvansarayı 2000, 176) (Eyice 1990, 282f.) (Eyice 1994 (h)) (Müller-Wiener 1998, 126-129) (Mathews 1976, 322-345)

スクとして用いられるようになり、現在に至っている⁽²¹⁾。

13. ギュル・モスク *Gül Camii*

11～13世紀にかけて、9世紀頃のより古い教会の上に建てられたと考えられるが、詳しい来歴については不明である。伝説によると、コンスタンティノポリスの征服に際して、この教会全体が薔薇で彩られているのを目撃したオスマン軍の兵士たちによって「薔薇 *Gül*」モスクと言われたとされる。ただし、より信憑性が高い説としては、敷地内にギュル・ババ *Gül Baba* という名のスーフィーの墓が存在すると考えられていることに由来すると思われる。征服後は、金角湾に近いという立地条件から教会の地下にある貯蔵庫 *mahzen* が船舶材料の倉庫として利用されていた。『モスクの花園』には、セリム3世 (*Selim III*, d.1808年) 期にモスクにされたとあるが、これは印刷版の誤りであり写本ではセリム2世期であると記されている。しかし、建築史家のアイヴェルディ *Ayverdi* と社会経済史家のバルカン *Barkan* による1546年付の『ワクフ調査台帳』についての研究によると、すでにH.895 (1490)年にはモスクとされていたことがあきらかにされている。このことからギュル・モスクも、おそらくバイエズイト2世期に行われた都市の「再活性化政策」の一環として、修復と改修が実施されたものと考えられる。建物自体は、1509年のイスタンブル大地震によって大きく損傷したと推察され、1559年のイスタンブルを活写したメルキオール・ロリキス (*Merchior Lorichs*, d.1583年頃) のパノラマには木製の屋根をもつモスクとして描かれている。おそらくは、前述のセリム2世期にモスクに転用されたとする『モスクの花園』における誤解も、その時期にミナーレが建設あるいは再建されたことに起因すると思われる。ギュル・モスクは、その後の1766年に発生したイスタンブル大地震でも損傷したものの修復され、現在も引き続きモスクとして利用されている⁽²²⁾。

⁽²¹⁾ (Ayvansarayi 2000, 175) (Eyice 1990, 284f.) (Eyice 1994 (i)) (Mathews 1976, 346-365) ただし、モスクとされた時期がより早い1587年末から1588年中頃にかけてだとする見解も存在する (Müller-Wiener 1998, 132-135)。

⁽²²⁾ (Ayvansarayi 2000, 207) (Eyice 1990, 281) (Eyice 1994 (j)) (Müller-Wiener 1998, 140-143) (Mathews 1976, 128-139) (Ayverdi, Barkan 1970, 3)



14. ハムザ・パシャ・モスク Hamza Paşa Mescidi (Peykhane Mescidi/Tahta Minare Mescidi)

かつて、ファーティフ区のチェムベルリタシュ Çemberlitaşı 地区とスルタンアフメト Sultanahmet 地区の間に存在していたと考えられる建物である。『モスクの花園』によると、教会を改修したモスクであるとされるが、元の名称や規模については何も分からない。別名のひとつがタフタ・ミナーレ・モスク Tahta Minare Mescidi であるとされ、これが「板のミナーレ」を意味することから比較的小規模なものであったのではないかと推測される。モスクに名を遺したハムザ・パシャ (Hamza Paşa, d.1687 年) は、H.1094 (1683/83) 年にエジプト州総督に任命され、その任期中に同地で死去したため、それまでにモスクに転用されたと考えられる。その後いつ、どのようにしてモスクが失われたのかについても不明である⁽²³⁾。

15. ハイダルハーネ・モスク Haydarhane Mescidi

かつて、ファーティフ区のサラチハーネ Saraçhane に近いホルホル Horhor 地区にあったとされる建物である。クラインによると、6世紀に建てられた聖ポリュクトス Poly-euktos 教会ではないかとされるが、確証はない。モスクの名前は、メフメト2世に仕えた馬印持ち Alemdar の一人でありスーフィーでもあったと考えられるハイダル・アリ・デデ

⁽²³⁾ (Ayvansarayi 2000, 107) (Eyice 1990, 290)

Haydar Ali Dede が、バイェズイト 2 世期に修道場 tekke とモスクとしたことに由来する。後にはカーディリー教団の修道場としても用いられた。共和国期の 1934 年にモスクは壊され、修道場の建物もこの地区を管轄するファーティフ区によって 1950 年に撤去されたため、現在はその痕跡もほとんど残されていないという⁽²⁴⁾。

16. フラーミー・アフメト・パシャ・モスク Hırami Ahmed Paşa Mescidi

前述のフェティイエ・モスクの近くに現存する。おそらく 12 世紀の洗礼者聖ヨハネ Ioannes Prodromos en to Troullo 教会であると考えられる。コンスタンティノポリスの征服後の 1454～56 年にかけて、後にフェティイエ・モスクとされるパンマカリストス修道院がモスクとされたアヤソフィアに代わる新たな総主教座とされたことに伴って拡張された際に、それ以前に同修道院にいた女子修道士たちの移管先となったことで初めて記録に現れる。以後も、約 150 年間にわたって女子修道院として用いられたと推測される。フェティイエ・モスクと同時期の 1587～90 年にかけて、同様の理由によって、イエニチェリ長官 Yeniçeri Ağası から宰相 Vezir となったフラーミー・アフメト・パシャ (Hırami Ahmed Paşa, d.1591 年) によってモスクへと転用された。共和国期の 1930 年代にワクフ局から「管轄外」とされて放棄され廃墟となりつつあったが、1960 年代に修復が実施されて再びモスクとして活用されている⁽²⁵⁾。

17. ホジャ・ハイレッティン・モスク Hoca Hayreddin Mescidi (Bodrum Mescidi)

すでに述べたファーティフ区のラーレリ地区に存在するボドルム・モスクの付近にあったと考えられ、別名は同じくボドルム・モスクである。『モスクの花園』には、かつて教会であったという言及がないものの、エイジェは改修されたモスクに含めている。メフメト 2 世期のウラマーであり、H.874 (1469/70) 年に死去したホジャ・ハイレッティン Hoca Hayreddin によってモスクへと転用されたと考え、その時期は 1453～70 年に限定されることになる。1918 年にジバリ地区から出火してファーティフ地区にも大きな被害をもたらした大火によって焼失し、現在は跡形も残されていない⁽²⁶⁾。

18. イムラホル・イルヤス・ベイ・モスク İmrahor İlyas Bey Camii

ファーティフ区のサマトヤ地区において大城壁がマルマラ海に接続する南端に近い場所

⁽²⁴⁾ (Ayvansarayi 2000, 106) (Eyice 1990, 290)

⁽²⁵⁾ (Ayvansarayi 2000, 42) (Eyice 1990, 286f.) (Müller-Wiener 1998, 144-146) (Mathews 1976, 159-167)

⁽²⁶⁾ (Ayvansarayi 2000, 70) (Eyice 1990, 290)

に廃墟となって立つ、イスタンブルに現存する最古の教会の遺構である。454年あるいは463年にストゥディオス Studios 修道院に属する洗礼者聖ヨハネ Ioannes Prodromos 教会として建設された。コンスタンティノポリスの征服後に修道院は閉鎖されたと考えられ、クレインによると1470年に、エイジェは1486年頃にアルバニア出身の厩舎長 Mir-i ahur であったイルヤス・ベイ (İlyas Bey, d.1500年頃) によってモスクに転用されたとする。ただし、16世紀初頭にはトプカプ宮殿の敷地内に東屋 köşk を建設するための石材工房としても機能していたとされる。1782年のサマトヤ地区における火災や1894年のイスタンブル大地震では被害を受けた後に修復されたものの、1923年の火災の後は修復されずに現在に至っている⁽²⁷⁾。



19. イーサー・カプス・モスク İsa Kapısı Mescidi (İbrahim Paşa Mescidi/Manastır Mescidi)

ファーティフ区のジェッラフパシャ Cerrahpaşa 地区に13世紀末から14世紀前半頃に建設されたと考えられる教会を母体とするものの、その名称も来歴も不明である。コンスタンティノポリスの征服後、約100年が経過した1551年、クレインによると1560年に宰相であったハドゥム・イブラヒム・パシャ (Hadım İbrahim Paşa, d.1562/63年) によってモスク

⁽²⁷⁾ (Ayvansarayı 2000, 216) (Eyice 1990, 280) (Müller-Wiener 1998, 147-152) (Mathews 1976, 143-158)

クとされた。ただし、名称の由来でもある付近にあったイーサー門（イエス門 İsa Kapısı）が1509年のイスタンブル大地震で倒壊していることから、おそらくはこの教会も大きな被害を受けて、モスク転用時にはすでに廃墟となっていた可能性が高いと考えられる。また改修に際しては、付近にイスラーム学院も建設され、いずれも著名な建築家であるミマル・スィナンの手になるとされる。1648年のイスタンブル地震で被災した際には修復されたものの、1894年のイスタンブル大地震によってまたも被害を受け、そのまま放置されたまま、現在も廃墟の状態となっている⁽²⁸⁾。

20. カレンデルハーネ・モスク Kalenderhane Camii

ファーティフ区のシェフザーデバシ Şehzadebaşı 地区にあるヴァレンス水道橋 Bozdoğan Kemerli 付近に位置する建物は、368年に建設された同水道橋から給水を受けた4世紀末から5世紀初頭のもので推測されるローマ浴場を起源とする。水道橋が使用不能になるとともに放棄された公衆浴場の上に、6～8世紀にかけて教会が建設されたと考えられている。コンスタンティノポリスの征服後に、建物はメフメト2世によって早い段階で、神秘主義教団のひとつカレンドリー Kalendari 教団の修道場とされた。モスクの名称はこのことに由来する。おそらくは18世紀前半に頻発した自然災害、たとえば1718年の大火、1720年の地震および1727年の火災などによって相次ぐ被害を受けた建築物は、ハレムの実質的な運営責任者である黒人宦官長 Darüssaade Ağası のハーフズ・ベシル・アー Hafız Beşir Ağa によって修復されて、以後はモスクとして使用された。トルコ共和国の建国後も1930年代まで使用されていたモスクは、暴風によってミナーレが倒壊するなどの被害を受けた後に、放棄された。しかし、1966～75年の間に学術的な調査が行われたことと並行して修復が行われ、現在もモスクとして用いられている⁽²⁹⁾。

⁽²⁸⁾ (Ayvansarayi 2000, 224) (Eyice 1990, 289) (Müller-Wiener 1998, 118f.) (Mathews 1976, 168-170)

⁽²⁹⁾ (Ayvansarayi 2000, 184f.) (Eyice 1990, 280f.) (Kuban 1994) (Müller-Wiener 1998, 153-158) (Mathews 1976, 171-185)



21. カーリエ・モスク Kariye Camii

大城壁のエディルネ門 Edirne Kapı 付近に現存する。コーラ Khorá 修道院に付属する教会であるが、本来は「郊外」を意味することから、大城壁が建設される以前すなわち5世

紀初頭にはすでに存在していた可能性があると考えられる。また、ユスティニアヌスの皇妃であったテオドラ (Theodora, d.548年) の叔父であるテオドロス Theodoros によって建設されたという伝説は、信憑性が低いという。いずれにしても、現存する建物に連なる修道院の歴史は、アレクシオス1世の義母マリア・ドゥカイナ (Μαρία Δούκαινα, d.1095年頃) によって修復された11世紀末に遡る。コンスタンティノポリスの征服から約50年が経過したバイエズイト2世の治世に、他のモスクと同じく市街の「活性化政策」の一環として大宰相ハドゥム・アティク・アリ・パシャ (Hadım Atik Ali Paşa, d.1511年) によってモスクに転用された。その死去がH.917 (1511)年であるため、転用はそれまでに行われたと考えられる。モスクは1766年のイスタンブル大地震によって被害を受け、修復された。教会の時代から残された数多くの美しいモザイクによって知られる建物は、共和国期に入った後にモスクとして用いられなくなったこともあって、第二次世界大戦後の1948年にはアヤソフィア博物館の管理下におかれた。そして現在も博物館として一般に公開されている⁽³⁰⁾。



⁽³⁰⁾ (Ayvansaraylı 2000, 178) (Eyice 1990, 286) (Eyice 1994 (k)) (Müller-Wiener 1998, 159-163) (Mathews 1976, 40-58)

22. カスム・アー・モスク Kasım Ağa Mescidi

大城壁に近いカラギュムリュク Karagümrük 地区にある建物である。同じく付近にある教会から転用された後述のオダラル・モスクと修道院複合施設群を構成していた可能性が高いが、元の名称も含めて詳細は不明である。コンスタンティノポリスの征服後、メフメト2世期にイエニチェリのセクバンバシュ Sekbanbaşı であったカスム・アー Kasım Ağa によってモスクとされた。残されたワクフ記録によると1506年が最も古い年代である一方で、モスクの碑文によると1460年に転用されたことが記されている。1894年のイスタンブール大地震によって大きく損傷した後、1919年のカラギュムリュク火災によって付近が焼き払われたため、長期間にわたって廃墟のまま放置された。第二次世界大戦後にイスタンブールへの移住が急速に進むと住宅不足が発生し、この廃墟もまた「一夜建て gecekondu」と呼ばれた不法建築によって住居の一部とされて占拠された。1977年によろやく再建された後に、1989年には民間の篤志家によってミナーレが付設されて、現在もモスクとして用いられている⁽³¹⁾。

23. ケフェリ・モスク

先述のカスム・アー・モスクと同じく、カラギュムリュク地区にある建物である。東側に外陣を有する教会建築に対して、南北に長い建物であることから、おそらくは修道院に付属した食堂だったのではないかと考えられている。また、コンスタンティノポリスの征服時には、すでに放棄されていたのではないかと推測される。それから20年以上が経過した1475年6月にオスマン艦隊がクリミア半島のカッフア (Kefe, 現フェオドスィア Feodosia) を征服すると、そこから移住したカトリックのジェノヴァ人とアルメニア正教会派の人々からなる数百人規模の集団のために、近くにあるオダラル・モスクとともに移住者たちの礼拝堂として与えられた。そして、カトリックの4家族によって管理され、ドメニコ修道会によって運営されるかたちで聖ニコラ San Nicola 教会となった。建物の内部は二分され、カトリックとアルメニア正教会派がともに祈るというイスタンブールの文化的共生の状況を象徴するかのような場所であったとされる。しかし時とともに街区のキリスト教徒は減少して1580年代には10~12戸が残るのみとなり、徐々に教会の運営費用にも事欠くようになったという。一方で、街区のムスリムは増加し、時に教会の修復を巡って対立も起きるようになった。ただし、建物を破壊から救おうとしたのも同じ街区に住むム

⁽³¹⁾ (Ayvansarayi 2000, 179) (Eyice 1990, 287) (Eyice 1994 (I)) (Müller-Wiener 1998, 164f.) (Mathews 1976, 186f.)

スリム女性であったと伝えられ、彼女たちは家々から飛び出して教会を守ったとされる。

ところが1626年、奇妙な事件が起こる。やや長文となるが、エイジェの研究を参照しつつ、顛末を以下に記したい。この年、アナトリア東部のヴァン Van から、人々が「鈴の修道士」(Çancı Keşişi) と呼んだアルメニア人がイスタンブルに来訪し、鈴をかき鳴らしながら市街を練り歩いて、周囲に集まった人々に様々な効能を持つという聖遺物を見せつつ説法を行っていた。ある日、この聖遺物とオスマン皇帝に献上するべく持参した金貨2万枚に相当するという品物を盗まれたと主張したこの修道士は、聖ニコラ教会のアルメニア正教会派の区画を管理する聖職者を告発したことから、この聖職者は特獄された。その後、修道士は同教会の中庭から盗まれた品々を発見したと言ってイスタンブルを立ち去ろうとしたが、今度は同じ街区に住むムスリムたちが修道士を捕えて、皇帝に献上するはずだったという品を差し出すように迫った。アルメニア正教会派の人々は内々で金貨6,000枚を集めて修道士を救い出しイスタンブルから遠ざけたが、怒りが収まらないムスリム住民は騒乱の舞台となった教会の扉を封印してしまった。そこで、アルメニア正教会派の人々は封印を解くべく、一方でムスリムを所轄するムフティー müftü に金貨200枚を差し出し、他方ではアルメニア正教会派コミュニティの長である総主教 patrik に訴え出た。しかし宗派共同体内部の「自治」に責任を負う総主教は、こうした混乱を引き起こしたことを理由に一団を追い払うと、同じ一団はムフティーのもとに赴き、先に献上した金貨200枚を奪い返すという行動に出た。ここに至って、ムフティーは騒乱に際して集まっていた大勢のムスリムたちとともに教会へと押し入り、そこで礼拝を行って同教会をモスクに替えてしまったという。別の研究は、この事件の後に教会がモスクに転用されたのは、やや遅れて1629～30年にかけてのことであるとする。ただし、いずれにしてもこの時、イスタンブル市政の責任者 İstanbul Kaymakamı であり、後に大宰相となるレジェブ・パシャ (Receb Paşa, d.1632年) の裁定によって、アルメニア正教会派の人々には金角湾に近いバラト Balat 地区にあった古いギリシア正教会が代わりに与えられた。ケフェリ・モスクは、1970年代にワクフ局によって修復され、現在もモスクとして用いられている⁽³²⁾。

24. コジャ・ムスタファ・パシャ・モスク Koca Mustafa Paşa Camii

ファーティフ区のコジャ・ムスタファ・パシャ Kocamustafapaşa 地区にあり、モスク、イスラーム学院、ハمامおよび複数の墓廟などを包含する複合施設群を形成している。5

⁽³²⁾ (Ayvansarayi 2000, 206f.) (Eyice 1990, 287) (Eyice 1994 (m)) (Müller-Wiener 1998, 166-168) (Mathews 1976, 190-194)

世紀のネクロポリスの上に6世紀には男子修道院が建てられていたと推測されるが、8世紀末にはこれが女子修道院に変えられたと考えられる。現在の建物の母体となっている大部分は、13世紀後半にラテン帝国からコンスタンティノポリスを奪還した後に、ミカエル8世（Μιχαήλ Η', d.1282年）の姪テオドラ（Θεοδώρα, d.1300年）によって再建されたアンドレアス Andreas 修道院に属する教会である。しかし、この施設の付近も15世紀初頭には、ブドウ畑が広がるすでに人が住まないような場所となっていたという。コンスタンティノポリスの征服から30年が経過した頃、すでに述べたアイヴァンサライにあるアティク・ムスタファ・パシャ・モスクと同じく大宰相コジャ・ムスタファ・パシャによってモスクとされた。現存する碑文を始めとする様々な史料によって、H.891（1486）年がその時期であると推測され、おそらくは、バイエズイト2世期に行われた都市の「活性化政策」の一環によるものと考えられる。モスクとその周辺に建設された複合施設群は、オスマン朝期を通じて神秘主義教団の重要な拠点のひとつともなったため、『モスクの花園』における記述も非常に詳しい。後に1766年のイスタンブル大地震によって大きく損傷したものの修復され、現在も街区の名称とされているほか、大規模なモスク複合施設群として多くの人々の信仰のよりどころとされている⁽³³⁾。

25. キュチュク・アヤソフィア・モスク Küçük Ayasofya Camii

スルタンアフメトに近いジャンクルタラン Cankurtaran 地区とカドゥルガ Kadırga 地区の間に位置する建築物である。ユスティニアヌス1世が即位後の530年頃から建設させたとされる聖セルギオスとバッコス Hag. Sergios kai Bakchos 教会を母体とする。当時、この付近にあった宮殿の教会としての機能も兼ね備えていたとされる。コンスタンティノポリスの征服の後、約50年が経過した16世紀初頭にバイエズイト2世期の黒人宦官長であったキュチュク・ヒュセイン・アー（Küçük Hüseyin Ağa, d.1510年）によってモスクとされた。1546年付の『ワクフ調査台帳』には、H.913（1507）年のワクフ記録があることから、これ以前に転用されたと考えられる。オスマン朝期には、その周辺に後にイスラーム学院とされた修道場や公衆浴場も追加された。また、1648年と1763年のイスタンブル地震によって損傷したことがトプカプ宮殿文書館に所蔵される記録に残されている。その後も修復が重ねられ、現在もモスクとして用いられている⁽³⁴⁾。

⁽³³⁾ (Ayvansarayı 2000, 180-184) (Eyice 1990, 285f.) (Eyice, Tanman 1994 (a)) (Müller-Wiener 1998, 172-176) (Mathews 1976, 3-14)

⁽³⁴⁾ (Ayvansarayı 2000, 209) (Eyice 1990, 280) (Eyice 1994 (n)) (Müller-Wiener 1998, 177-183) (Mathews 1976, 242-259)

26. マナストウル・モスク **Manastır Mescidi**

大城壁に近いトプカプ Topkapı 地区のミット大通り Millet Caddesi にある市バス車庫に取り込まれるようにして建つ。その名称から、元来は修道院 **manastır** であったと考えられるが、詳しい来歴については不明である。『モスクの花園』によると、メフメト 2 世に仕え、宦官 **hadım** でもあったムスタファ・チャヴシュ **Mustafa Çavuş** という人物によってモスクへと転用されたとされる。その時期も明確ではないが、メフメト 2 世に仕えていたことから考えると、遅くともバイエズイト 2 世期にはモスクとされていた可能性が高い。また同史料によると、元来はミナーレを持たなかったが、おそらく 18 世紀に修復された際に木製のミナーレが追加されたという。共和国期におけるイスタンブルの近代化政策に伴って 1956 年から開始されたミット大通りの開通工事により、街区が消滅したこともあって大通りの脇に新たに建設された市バス İETT の車庫内部に取り残される結果となった。一時期は、車庫の資材置き場として用いられていたが、その後にはバス運転手や車庫の管理員のためのモスクとして利用されるようになった⁽³⁵⁾。



⁽³⁵⁾ (Ayvansaraylı 2000, 226) (Eyice 1990, 287) (Eyice 1994 (o)) (Müller-Wiener 1998, 184f.) (Mathews 1976, 195-197)

27. オダラル・モスク *Odalar Mescidi (Kemankeş Mustafa Paşa Mescidi)*

かつて、エディルネ門に近いカラギュムリュク地区にあって、すでに述べたカスム・アー・モスクのわずか 25 m ほど北に位置し、ケフェリ・モスクにも近かったとされる建物である。おそらくビザンツ帝国期の巨大な修道院複合施設群の一角を形成していたと考えられる。まず7世紀に倉庫のような建物が建設され、その上に教会が付設されたが、その後の第四次十字軍の占領に際して焼失したとされる。13世紀末に教会は再建されたが、コンスタンティノポリスの征服後、1475年にケフェリ・モスクと同じく、カッフアから来てこの地区に集住したカトリックのジェノヴァ人たちに与えられた。コンスタンティノポリスの聖マリア *Santa Maria di Constantinopoli* 教会と名付けられた教会の傍には、別に修道院も存在していたという。150年間にわたってドメニコ修道会によって運営された教会は、1622年11月12日にサントリーニ司教ピエトロ・デマルキ (*Pietro De Marchi, d.1648年*) の訪問を受けた⁽³⁶⁾。その報告によると、この時すでに教会は大きく損傷していたという。

1620年代にモスクに転用されたと考えられるケフェリ・モスクに続くかたちで、1640年に大宰相ケマンケシ・カラ・ムスタファ・パシャ (*Kemankeş Kara Mustafa Paşa, d.1644年*) によってモスクとされた。ただし、おそらくはケフェリ・モスクの項で紹介した事件に関連して、この教会もまたモスク転用に先立つ1636年にはすでに閉鎖されていたことが知られている。この時、地元の人々に非常に崇敬されていた「コンスタンティノポリスのマドンナ *Madonna di Constantinopoli*」として知られる有名な聖母マリアのイコンは、ヴェネツィアのバイロ *baylo* によって買い取られ、ガラタ地区にあるサン・ピエトロ *San Pietro* 教会に移された。また、カトリックの関係者は、教会を元の状態にしようと奔走し、1644年には神聖ローマ帝国の使節としてヘルマン・ツェルニン (*Hermann Czernin, d.1651年*) 伯爵がイスタンブルを訪れて大宰相ケマンケシ・カラ・ムスタファ・パシャとも会見している⁽³⁷⁾。しかし、ムスタファ・パシャは今やもう時機を逸したこと、またキリスト教徒たちには狭義のイスタンブルの外、すなわちガラタやベイオールに十分な数の教会が存在していることを理由にこの希望を退けた。一説によると、付近にイエニチェリの房舎 *odalar* があったため、また別の説によると、本項の冒頭でも述べたモスクの基層部にある倉庫が

⁽³⁶⁾ 長らくジェノヴァ領であったキオス島の生まれで、この時はサントリーニ島の司教であり、後にイズミルの大司教となった。エイジェは、「枢機卿デマルキス *Kardinal Demarchis*」としているが、おそらくは誤りである (*Eyice 1994 (p)*)、<http://www.catholic-hierarchy.org/bishop/bmrchp.html> (2019年1月3日確認)。

⁽³⁷⁾ この人物についてもエイジェは、「使節のツェルニン男爵 *elçi Baron Czernin*」とのみ記しているが、不正確である (*Eyice 1994 (p)*)。実際には、彼はボヘミアの伯爵 *Graf* であり、1617年に続き、その生涯で2度にわたって神聖ローマ帝国の使節としてイスタンブルを訪れた人物である。

小部屋 *odalar* に分かれていたことから、この名で呼ばれた。1919年の火災によって甚大な被害を受けたモスクは、1955年まで廃墟のかたちで、しかし管理人が置かれて存在していたという。ところが、その後のイスタンブルにおける都市化の進展に伴い、1960年代には一夜建ての不法建築住居に飲み込まれるようにして姿を消してしまった⁽³⁸⁾。

28. パルマクカプ・モスク *Parmakkapı Mescidi* (*Purkuyu Mescidi*)

ファーティフ区のスルタン・セリム・モスク *Sultan Selim Camii* から金角湾に下った先にあるジバリ *Cibali* 地区に、かつて存在していた建築物である。『モスクの花園』によると、教会を転用したモスクであるが、母体となった教会の来歴は不明である。また、その綽名から書記 *Katib* であったと考えられるヒュスレヴ・キヤーティブ *Hüsrev Katib* がモスクとしたとするが、この人物についても詳細は不明であるため、転用の時期もあきらかではない。そのため同書が編纂された H.1193 (1779) 年以前にモスクとされたということしか確定できない。このモスクは、何らかの損傷を受けて 1870 年代に新たに建て直されたが、その後の 1918 年の火災によって焼けたとされる。おそらく廃墟のかたちで放置された結果、共和国期に入った 1935 年頃、遅くとも 1950 年代には完全に消え去ってしまった。そのため、現在ではかつての位置の確定さえ困難である⁽³⁹⁾。

29. サンジャクタール・ハイレッティン・モスク *Sancakdar Hayreddin Mescidi*

サマトヤ地区に現存する正八角形の小規模な建物である。その特異な外観から、おそらくは 3~4 世紀の古代ローマ帝国後期に建造された墓廟であったと推察される。その後、東側に外陣が追加されてチャペルに変更されたと考えられる。その際に、近隣にあったガストリア *Gastria* 修道院の一部として使用された可能性が高いという。コンスタンティノポリスの征服時にはすでに廃墟となっていたとされるが、メフメト 2 世に仕えた馬印持ち *Alemdar* であったサンジャクタール・ハイレッティン・エフェンディ *Sancakdar Hayreddin Efendi* によって後にモスクとされた。その時期は明確ではないものの、上述の人物が存命中の時期であるとするならば、メフメト 2 世か、あるいは遅くともバイエズィト 2 世の治世であると推定される。後年、1894 年のイスタンブル大地震によって大きく損傷した建物は、そのまま放置されて、共和国期に入ると同じような命運を辿った他の多くの小規模モスクと同様に、廃墟のまま一夜建ての不法建築に飲み込まれつつあった。しかし、1973

⁽³⁸⁾ (Ayvansarayi 2000, 46) (Eyice 1990, 288) (Eyice 1994 (p)) (Müller-Wiener 1998, 188f.) (Mathews 1976, 220-224)

⁽³⁹⁾ (Ayvansarayi 2000, 73) (Eyice 1990, 290) (Eyice 1994 (q)) (Müller-Wiener 1998, 193)

年にワクフ局によって修復プロジェクトが立ち上げられ、その結果、1976年には再びモスクとしての使用が可能となって現在に至っている⁽⁴⁰⁾。

30. セクバンバシュ・フェルハト・アー・モスク *Sekbanbaşı Ferhad Ağa Mescidi*

かつて、ゼイレク地区にあった建築物である。『モスクの花園』によると教会を転用したモスクであるが、母体となった教会の名称や由来は分からない。イェニチェリのセクバンバシュであったフェルハト・アー *Ferhad Ağa* によってモスクとされたと考えられるが、この人物についての詳細や転用の時期も不明である。ただし、1546年付の『ワクフ調査台帳』には小規模なモスクとして記載されていることから、16世紀前半までには、すでにモスクとして機能していたとみられる。建物が消失した時期についても詳しくは分からないが、アラバジュ・バイエズイト・モスクと同様に、技術学校の学生たちによって作成され H.1264 (1848) 年に出版された地図には名称が存在し、1880年頃に作成された地図にはその名がないことから、19世紀の第三四半期に荒廃したと考えられる。1936年頃までは廃墟の状態に残されていたようであるが、現在はそれすらも確認することができない⁽⁴¹⁾。

31. セクバンバシュ・イブラヒム・アー・モスク *Sekbanbaşı İbrahim Ağa Mescidi*

かつて、ファーティフ区のクルクチェシュメ *Kırkçeşme* 地区に存在した建物である。ヴァレンス水道橋の100mほど北側、金角湾に向かってアタテュルク大通り *Atatürk Bulvarı* の左手(西側)の脇にあったと考えられる。周辺に類似の教会跡がないことから、修道院に属さない独立した教会であったとも推測されるが、名称も含めて詳細は不明である。前述のフェルハト・アーと同じく、メフメト2世のセクバンバシュで H.902 (1496/97年) に死去したイブラヒム・アー *İbrahim Ağa* によってモスクとされた。最古のワクフ記録が H.891 (1486) 年であることから、この頃にモスクに転用されたと考えられる。その後、おそらく1718年のイスタンブール大火によって焼けて放置されていたモスクは、皇帝アブデュルアズィズ (*Abdülaziz*, d.1876年) の母ペルテヴニヤル・スルタン (*Pertevniyal Sultan*, d.1884年) によって H.1254 (1838) 年に修復された。しかし、後に1908年あるいは1918年に発生した火災で再び損傷を受けて放棄され、共和国期の1943年には同地域に整備されたアタテュ

⁽⁴⁰⁾ (Ayvansarayı 2000, 140) (Eyice 1990, 288) (Eyice, Tanman 1994 (b)) (Müller-Wiener 1998, 194f.), (Mathews 1976, 231-236)

⁽⁴¹⁾ ただし、クレインは同モスクがあった場所を特定する際に、次のセクバンバシュ・イブラヒム・アー・モスクと混同して、アタテュルク大通り沿いのヴァレンス水道橋の北側にあると記述している (Ayvansarayı 2000, 144) (Eyice 1990, 290) (Eyice 1994 (r))。

ルク大通りの開通に伴って、その進路からは外れていたにもかかわらず「土地の有効活用」のために撤去された。現在はいくつかのスケッチや写真、図面が残るのみである⁽⁴²⁾。

32. スィナン・パシャ・モスク *Sinan Paşa Mescidi*

かつて、ファーティフ区の金角湾に近い海側の城壁にあるアヤ門 *Aya Kapı* の内側に位置した建物である。13世紀末から14世紀前半の小規模な教会であると思われるが、詳細は不明である。廃墟となっていた建物は、スレイマン1世 (*Süleyman I*, d.1566年) 期の著名な大宰相で女婿でもあったリュステム・パシャ (*Rüstem Paşa*, d.1561年) の兄弟で海軍大提督 *Kapdan-ı Derya* を務めたスィナン・パシャ (*Sinan Paşa*, d.1553年) によってモスクとされた。1546年付の『ワクフ調査台帳』には記録が見られないことから、1546～53年の間に転用されたと考えられる。その後、1782年にギュル・モスクの近傍で発生した火災、あるいは1833年にジバリ地区で発生した火災によって被災して放棄された。さらに1918年の火災によって焼き払われた街区では多くの建物が再建され、またその後の都市化の進展とともに家屋や工場が建設されたため、現在ではその姿を確認することはできない⁽⁴³⁾。

33. スィヴァスィー修道場モスク *Sivasi Tekkesi Mescidi* (*Yavsi Baba Tekkesi*)

ヤヴスィー・ババ修道場 *Yavsi Baba Tekkesi* とも呼ばれたスィヴァスィー修道場と、そのモスクは、かつてカラギュムリュク地区のスルタン・セリム・モスクの付近に存在していたとされる。『モスクの花園』には、バイエズイト2世が神秘主義教団のひとつバイラミー *Bayrami* 教団のシェイフ・ムフイッティン・メフメト・エフェンディ (*Şeyh Muhyiddin Mehmed Efendi*, d.1514年) のために開いた修道場のモスクとして、教会から転用されたことが記されている。母体の来歴については不明であるが、モスクとされたのがバイエズイト2世の在位中であることを考えると、その時期は1512年以前ということになる。その後、修道場はいくつかの神秘主義教団の拠点として共和国期の1925年に閉鎖されるまで用いられ続けた。しかし現在、その痕跡はまったく残されていない⁽⁴⁴⁾。

⁽⁴²⁾ (Ayvansarayi 2000, 142) (Eyice 1990, 288) (Eyice 1994 (s)) (Müller-Wiener 1998, 194f.) (Mathews 1976, 237-241)

⁽⁴³⁾ (Ayvansarayi 2000, 143) (Eyice 1990, 289) (Eyice 1994 (t)) (Müller-Wiener 1998, 198f.) (Mathews 1976, 260f.)

⁽⁴⁴⁾ (Ayvansarayi 2000, 135f.) (Eyice 1990, 290) (Işın 1994)

34. シェイフ・ムラト・モスク Şeyh Murad Mescidi (Kilise Camii)

かつて、ファーティフ区の花園側の城壁にあるアヤ門の内側、ギェル・モスクの付近に存在したと考えられる建物である。『モスクの花園』が伝える僅かな情報によると、シェイフ・ムラト Şeyh Murad という名の、おそらくは神秘主義教団に属する人物がモスクに転用したと考えられるが、その詳細は一切不明である。転用の時期についても、1546年付の『ワクフ調査台帳』はもとより、その後作成された1600年付の同台帳にも記載がないため、17世紀以降、『モスクの花園』が執筆された1779年以前のある時点でモスクとされた可能性が高い。また、エディルネ Edirne のカーディー（イスラーム法官 kadı）を解任されたウスキュダリー・ヒュセイン・エフェンディ Üsküdarî Hüseyin Efendi が同モスクにミンバル（説教壇 minber）を設置したことも記録されているが、この人物についても生没年をはじめ詳しい情報は分からない。19世紀の中頃、おそらく1833年のジバリ地区の火災で廃墟となったモスクは、H.1298（1880/81）年頃に撤去され、同じ場所には修道場が建てられたとされる。しかし、それもまた1918年の大火によって焼失し、共和国期の1930年代には遺構すらほとんど確認できない状態となったという。そして、1950年代には街区の再開発によってその足跡は完全に消し去られ、今ではかつての所在地の特定すら困難となっている⁽⁴⁵⁾。

35. シェイフ・スレイマン・モスク Şeyh Süleyman Mescidi

ファーティフ区の花園地区において、ゼイレク・キリセ・モスクの約250m南西に位置する建物である。おそらく古代ローマ帝国後期の墓廟として建設され、後にパントクラートル Pantokrator 修道院の図書館として用いられたとされる。コンスタンティノポリスの征服後、メフメト2世期のスーフィーの一人であるシェイフ・スレイマン Şeyh Süleyman によって、モスクとされた。現存するワクフ記録によると、15世紀末のH.904（1498/99）年に転用が実施されたという。その後、モスクは1756年のジバリ火災で延焼して修復がなされた後に、年代は不明ながら再び火災の被害に遭い、再修復がなされたと推測される。さらに1950年代にも修復が行われて、現在もモスクとして機能している⁽⁴⁶⁾。

⁽⁴⁵⁾ (Ayvansarayi 2000, 148) (Eyice 1990, 289) (Eyice 1994 (u)) (Müller-Wiener 1998, 202) (Mathews 1976, 313f.)

⁽⁴⁶⁾ (Ayvansarayi 2000, 147) (Eyice 1990, 287) (Eyice 1994 (v)) (Müller-Wiener 1998, 203) (Mathews 1976, 315-318)

36. シュヘダー・モスク Şüheda Mescidi

かつて、ファーティフ区のカラギュムリュク地区に存在したという建物である。古いビザンツ教会を転用したものと伝えられるが、何という教会であるのか、あるいはすでに述べたアジェム・アー・モスクのように教会の廃墟の一部を利用したものであるのかも含めて不明である。モスクへの転換それ自体は、1632～34年の間に、当時のシェイヒュルイスラーム Şeyhülislam であったアヒーザーデ・ヒュセイーン・エフェンディ (Ahizade Hüseyin Efendi, d.1634年) によって実施されたという。『モスクの花園』によると、このモスクの外には無名のある殉教者の墓が置かれていたこと、またムラト4世 (Murad IV, d.1640年) の怒りを買って罪なくして処刑されたとされる上述のアヒーザーデ・ヒュセイーン・エフェンディが市井の人々によって「殉教者」とみなされたことから、シュヘダー (Şüheda 殉教者たち) と名付けられたのではないかと推測される。1870年代のイスタンブールの地図にはすでに確認できないことから何らかの原因によって、これ以前の時期に消滅したものと考えられる⁽⁴⁷⁾。

37. トクル・デデ・モスク Toklu Dede Mescidi

かつて、ファーティフ区のアイヴァンサライ地区に存在した建築物である。ビザンツ期の教会が転用されたものであることは間違いないが、詳細については建築史の研究者たちによって長く激しい議論がなされてきた一方で、いまだ決定的な定説が形成されるまでには至っていない。『モスクの花園』の著者であるアイヴァンサライー・ヒュセイーン・エフェンディが生まれ、導師を務め、そして死去した場所でもあるため、少なくとも18世紀後半に至るオスマン期のモスクの状況については、同書において非常に詳細な情報を得ることができる。それによるとコンスタンティノポリスの征服後、建物は戦いに参加していたトクル・イブラヒム・デデ Toklu İbrahim Dede と呼ばれるスーフィーに与えられたとされる。同所には、ムハンマドの教友でウマイヤ朝期に実施されたコンスタンティノポリス攻囲戦に際して戦死したと民間に信じられているアブー・シャイバ・アル・フドゥリー (Abu Shaybat al-Khudri, d.694年頃) の墓所があり、前述のトクル・イブラヒム・デデは、その墓守となったという。そして、その死後は、自らも聖者の一員とみなされるようになったと考えられている。モスクに転換された時期は、バイエズイト2世期であると推定される。その後、アイヴァンサライ地区は多くの火災の舞台となり、このモスクも1729年、1755年、1772年、1861年および1863年に発生した火事のいずれか、あるいは複数のものによって

⁽⁴⁷⁾ (Ayvansarayi 2000, 144) (Eyice 1990, 290) (Eyice 1994 (w))

被害を受け、19世紀後半には廃墟となっていたという。1890年に民間の篤志家が修復を行って再びモスクとして機能するようになったものの、第一次世界大戦中の1915年に兵舎とされた後は、再びモスクとなることはなかった。そして共和国初期の1929年、このモスクの所有者を名乗る人物によって建物の大部分は解体され、唯一残されていた南側の壁も1980年には消滅したことから、現在は何の痕跡も残されていない⁽⁴⁸⁾。

38. ヴェファー・キリセ・モスク *Vefa Kilise Camii* (*Molla Gürani Camii*)

アタテュルク大通りの東側、スレイマニエ・モスクに向かう斜面に位置するヴェファー Vefa 地区に現存する建築物である。5世紀頃の建物の上に、おそらく11世紀頃に建設されたと考えられる聖テオドロス Hag. Theodoros 教会を母体とすると推察される。ラテン帝国からコンスタンティノポリスを奪還した後、13世紀末～14世紀にかけてのビザンツ期に大規模な修復と拡張が行われたとされる。コンスタンティノポリスの征服から30年ほど後に、当時のシェイヒュルイスラームであり、メフメト2世の師の一人にも数えられるシェムセッティン・アフメト・モッラー・ギュラーニー (*Şemseddin Ahmed Molla Gürani*, d.1488年)によって、モスクとされた。1546年付の『ワクフ調査台帳』によると、H.889 *Rebiyülevvel* (1484年3月)付のワクフ記録が存在することから、この頃にモスクへと転用されたと考えられる。その後、1833年にジバリ地区から出火してイスタンブルの広い地域に大きな被害をもたらした大火によってこのモスクも焼けたため、数年後に修復された。ヴェファー・キリセ・モスクは、イスタンブルに数あるビザンツ教会建築のなかでも西欧の美術史家たちの関心を最も集めた建築物の一つに数えられる。共和国期においては1972年に修復が行われて、現在もモスクとして利用され続けている⁽⁴⁹⁾。

⁽⁴⁸⁾ (Ayvansarayi 2000, 159-162) (Eyice 1990, 289) (Eyice 1994 (x)) (Müller-Wiener 1998, 206-208) (Mathews 1976, 376-382)

⁽⁴⁹⁾ (Ayvansarayi 2000, 208) (Eyice 1990, 283) (Eyice 1994 (y)) (Müller-Wiener 1998, 203) (Mathews 1976, 386-402)



39. ユルドゥズ・デデ修道場 Yıldız Dede Tekkesi

かつて、エミニョニユ Eminönü 地区のバフチェカプ Bahçekapı にあるイスタンブル商品取引所 İstanbul Ticaret Borsası の傍に存在したとされる建物である。母体となった教会についての詳細は不明である。『モスクの花園』によると、コンスタンティノポリス征服の際に生きていたユルドゥズ・デデ Yıldız Dede あるいはユルドゥズ・ババ Yıldız Baba と綽名されたネジメッティン Necmeddin という名のスーフィーに与えられたとされる。ただし、ユルドゥズ・デデは、教会を直接モスクには変えずハمامとした。このユルドゥズ・ハمام Yıldız Hamamı はメフメト2世のワクフに編入され、その収益はファーティフ・モスクの運営に充当されたと考えられる。その後、おそらく250年以上が経過したであろう1730年になって、マフムト1世 (Mahmud I, d.1754年) が即位した際に、ハمامの傍らにあったというユルドゥズ・デデの墓を再建するために修道場とモスクが付設されたとされる。この建物の転用は、教会がモスクとはされず、ハمامとされた稀有な例である。その理由は定かではないが、あるいはベアーが指摘したように、エミニョニユ地区には古くからユダヤ教徒の街区が存在していたためである可能性もある。しかし、この事例から確認されることは、ベアーの主張とは裏腹に、既存の非ムスリム街区のイスラーム化につながり場合によっては無用な摩擦が生じかねないモスクではなく、ハمامという宗教的に「中立的」かつ収入を生み出すワクフ財が選択されていたという事実である。エイジェによる

と、修道場を中心としてハマム、モスクおよび墓廟からなる複合施設群は、1983年頃に建設された新しい商業ビル *işham* の基礎工事に際して、完全に失われてしまったという⁽⁵⁰⁾。



40. ゼイレク・キリセ・モスク Zeyrek Kilise Camii

ファーティフ区にあり、金角湾を望む高台に位置するゼイレク地区に現存する建築物である。パントクラトール修道院の教会として、皇帝ヨハネス2世 (Ιωάννης Β', d.1143年)の妻でハンガリー王の娘であったエイレーネー (Ειρήνη, d.1134年)によって建設されたとされる。第四回十字軍の占領に際して略奪され、一説によるとヴェネツィア人貴族やラテン帝国皇帝の居所ともされたと言われるが、詳細は不明である。コンスタンティノポリスの奪還後に修復されたとみられ、その後も多くのビザンツ皇族たちの墓所となったことが知られている。コンスタンティノポリスの征服後に、修道院は、メフメト2世によってファーティフ・モスク複合施設群に付属するイスラーム学院が建設されるまでの間イスラーム学院として用いられ、その際に教会はモスクに転用された。その最初の教授 *müdürris* に任命されたゼイレク・モッラー・メフメト・エフェンディ (Zeyrek Molla Mehmed Efendi, d.1506年)に因んで、この名で呼ばれる。18世紀後半には大規模な修復が

⁽⁵⁰⁾ (Ayvansarayi 2000, 248f.) (Eyice 1990, 290) (Tanman 1994 (c))

なされたが、これは 1756 年のジバリ地区の火災か 1766 年のイスタンブル大地震の被害によるものと推定される。共和国建国後の 1950 年代には、損傷がかなり激しい状態であったとされるが、1966 年から修復が行われ、現在もモスクとして利用されている⁽⁵¹⁾。



⁽⁵¹⁾ (Ayvansarayi 2000, 132) (Eyice 1990, 284) (Eyice 1994 (z)) (Müller-Wiener 1998, 209-216) (Mathews 1976, 71-101)

II. 転用が実施された時期とイスタンブルの「イスラーム化」

ここまで、オスマン朝統治下のイスタンブルにおいて、教会やその関連施設からモスクに転用された個々の建築物について詳細に検討してきた。その総数は、『モスクの花園』の記述や先行研究の成果から確認できるだけでも40に上った⁽⁵²⁾。ここからは、以上の結果を踏まえて、それぞれの建物が転用された時期や要因について、何らかの傾向が確認できるのか否かについて考察していきたい。

その際、あくまで便宜的にはあるが、オスマン朝期における近代以前のイスタンブルの都市的発展を以下の3つの時代に大別しつつ考えていく。まず、1453年のコンスタンティノポリスの征服から1481年のメフメト2世の死去を経て、その後継者となったバイエズイト2世の治世が終わる1512年までの約60年間を都市の「復興期」とする。よく知られているように、ビザンツ帝国末期においては、その領土的縮小と並行して、都であったコンスタンティノポリスもまた徐々に荒廃に向かったとされる。具体的な規模については議論の余地が残されているものの、人口は最盛期に比べると著しく減少し、15世紀においては大城壁の内側にさえ畑が広がるような状態であったとされる。こうした状況に加えて1453年の攻囲戦で受けた戦災から復興し、オスマン朝の新たな都として整備されていく期間がこの時期に相当する⁽⁵³⁾。

次に、1512年から16世紀が終わる1600年までの約90年間を都市の「発展期」としたい。この時期には、オスマン朝の領土が急速に拡大するとともに、帝都イスタンブルの規模もまた巨大化していったことが知られている。この間は、不足する水や食料を確保するために新たな給水システムが整備されるとともに（Çeçen 1988）、多くの人口を抱えるイスタンブルを養うための食糧供給体制が構築された時期でもあった（澤井 2015）。とりわけ46年の長きにわたったスレイマン1世の治世には、その名を冠したスレイマニエ・モスク複合施設群 Süleymaniye Külliyesi や愛妻ヒュッレム・スルタン（Hürrem Sultan, d.1558年）によるハセキ・スルタン・モスク複合施設群 Haseki Sultan Külliyesi をはじめとして、父親の名を付したスルタン・セリム・モスク Sultan Selim Camii, 愛娘のミフリマフ・スルタン・

⁽⁵²⁾ ただし、トプカプ宮殿の敷地内に取り残されたために、モスクではなく初期には武器工房 *cebehane* に、後には武器庫とされたアヤ・イリニ教会や（Yücel 1994）、ヒポドロムの周辺にあって火薬庫として用いられたビザンツ期の名称が不明のギュンギョルメズ *Güngörmez* 教会を加えると、教会から転用された建築物の総数は少なくとも42ということになる。また、ギュンギョルメズ教会はバイエズイト2世期の1489年に落雷によって破砕したとされ（Cazar 2002, 361）、クルムタクフはその後にモスクとされたと考えているようであるが、詳細については不明である（Kırımtayfı 2012, 75f.）。

⁽⁵³⁾ この時期にはまた、1509年に発生したイスタンブル大地震という未曾有の天災からの復興も実施されていたことを付記しておきたい（澤井 2012）（澤井 2015）。

モスク Mihrimah Sultan Camii あるいはその夫で女婿のリュステム・パシヤ・モスク Rüstem Paşa Camii といった数多くのモスクや公共建築物が続々と建設されていった点で、イスタンブルという都市の発展におけるひとつの画期であったと行うことができよう。

1600年以降の時期については、とりあえず都市の「成熟期」としておきたい。この期間にも、1617年に落成したスルタン・アフメト・モスク Sultan Ahmed Camii や、1660年のイスタンブル大火後に完成し、ペアーが「イスラーム化」の象徴と見做したイエニ・ヴァーリデ・モスク Yeni Valide Camii (イエニ・ジャーミイ Yeni Cami) などの重要な建築物が追加された。ただし、モスクも含めた公共施設が増加していく速度は、それ以前の時代と比べると相対的にはあれ、緩やかになったと考えられる。

まず、教会やその関連施設がモスクへと転用された時期については、あきらかな偏りがみられる。具体的には、全体の過半数を優に超える数の教会とその関連施設が、コンスタンティノポリスの征服から50年以内の15世紀後半にモスクへと転用されていることが確認される。また、史料からは正確な時期の特定が困難なもの、メフメト2世とそれに続くバイエズイト2世の治世には転用が実施されたことが確認できる事例も含めると、その総数は27件となり、これは全体の67.5%を占めることになる⁽⁵⁴⁾。すなわち、この事実を上記の時代区分に当てはめるならば、教会とその関連施設がモスクに転用された事例の実に約7割が「復興期」に集中しているのである。一方で、16世紀の大部分を占める都市の「発展期」については6件、全体の15%の事例を確認することができた。「発展期」に区分した期間の長さは、「復興期」の約1.5倍の90年近くに及ぶにもかかわらず、教会からモスクへと転用された事例の実数は激減したと言ってよい。実際、年あたりに換算すると「発展期」における転用の件数は、「復興期」のその約6分の1程度に過ぎないのである。そして17世紀以降の「成熟期」になると件数はさらに減少して僅かに5件、全体の12.5%となる。なお、転用の時期が不明なものは2件、全体の5%であった⁽⁵⁵⁾。

以上のデータからあきらかなことは、教会のモスクへの転用という事例に着目してイスタンブルの「イスラーム化」が急速になされた時期の存在をあえて特定するとするならば、それはとりもなおさず征服直後からメフメト2世の後を継いだバイエズイト2世の治世ま

⁽⁵⁴⁾ ただし、すでに述べたように、この数にはモスクではなくハмамに転用されたユルドゥズ・デデ修道場の例も一件含まれている。

⁽⁵⁵⁾ しかも、この集計を行うにあたっては、モスクへの転用が確認できた史料自体の成立年をその時期として採用した。例えば、転用の時期が不明ながらも1546年付の『ワクフ調査台帳』に初めて存在が確認できるモスクの場合、征服直後に転換された可能性も残されているものの、16世紀中頃を転用の年代とした。そのため実際の傾向は、本稿における分析結果よりも、さらに「復興期」に前倒しされている可能性も否定できない。

での「復興期」であったという一語に尽きよう。一方で、ベアーがイスタンブルの「イスラーム化」を強調した17世紀については、教会のモスクへの転換はわずか5例にとどまっている。それでは各時代に見られる、これほどまでに明確な差異はいったい何を意味しているのだろうか。続いては、転用の時期に以上のような大きな偏差がみられた要因について考えてみたい。

「復興期」において、数多くの教会をはじめとする関連施設がモスクに転用された最大の原因は、征服直後から開始されたオスマン朝による都市運営に際して、必要とされた様々な設備が征服以前のコンスタンティノポリスには存在していなかったことに求められよう。無論、アヤソフィアのように都市そのものを象徴するような巨大建築物は「征服の証左」として、いち早くモスクへと変えられた。しかし、それ以外の事例たとえば、すでに見たように「教会モスク」(Kilise Camii)とも呼ばれたエスキ・イマーレト・モスクや、同じく「教会」(Kilise)という言葉が含まれるゼイレク・キリセ・モスクの場合は、単にモスクの不足を補うためだけでなくイスラーム学院や救貧施設など、征服以前には存在していなかった、しかしオスマン朝の新都とされるためには必要不可欠であると見做された各種施設を早急に整備するために、既存の建築物として利用可能であった教会が転用されたと推測されるのである。また、エトイエメズ修道場モスクやハイダルハーネ・モスクあるいはカレンデルハーネ・モスクのように、征服活動に従事したイスラーム神秘主義者たちの拠点となる修道場に転換された事例も同様の意図によるものであろう。

また、「転用」とは言うものの、エイジェをはじめとする多くの先行研究でも指摘されているように、実際にはコンスタンティノポリスの征服時には、すでに用いられていなかったり廃墟となっていたりしていた「教会」も少なくなかったと考えられる。この場合も、既存の建物あるいはその遺構を有効活用するために、また人口が希薄となって街区が縮小ないしは消滅していた場所に新たな街区を設置するために、実際にはほとんど「新築」と変わりがなくかたちでモスクへの「転用」が実施されたのである。そのため、すでに見てきたように、とりわけバイエズイト2世期に頻繁に実施された転用の多くは、いわゆる都市の「再活性化政策」の一環として理解されている。これらについては、先行研究のひとつであるクルムタユフの著作においても指摘されている(Kırımtayif 2012, 6-9)。以上の諸点に鑑みるならば、本稿の冒頭でも紹介したベアーの「イスラーム化」言説を鋭く批判するオズジャンがいみじくも述べるように、またオスマン史研究の碩学ハリル・イナルジュク Halil İnalçık による著名な論文でも主張されているように、イスタンブルはその征服直後にこそ支配の必要上、一定の「イスラーム化」がなされたと考えられるのである(Özcan

2011) (İnalçık 1990)。

一方、コンスタンティノポリスが征服されてから半世紀以上が経過し「発展期」に入ると、モスクなどの各種施設をできるだけ早く設置しようという意図は、それ以前の「復興期」に比べると見られなくなる。そのため、ある地区にモスクを備える必要が生じた場合には、従来のように既存の建物を転用するのではなく、まったく新たに建設されることが多くなった。他方で、フェティエ・モスクやフラミー・アフメト・パシャ・モスクのように、「戦勝記念」などの名目で、かつてのアヤソフィアの場合と同様にある種、象徴的に教会がモスクに転用される事例は、この時代においても継続して確認される。

17世紀以降の「成熟期」には、先述のように、イスタンブルという都市全体において、モスクをはじめとする公共施設が建設される速度自体が緩やかになった。こうした事情もあり、ベアーが主張する「イスラーム化」の言説とは正反対に、教会からモスクへと転用された事例はわずかに5件を数えるのみとなった。ただし、その少ない転用のなかで、経緯の詳細があきらかなケフェリ・モスクとオダラル・モスクの事例は注目に値する。すでに詳しく紹介したように、1626年のアルメニア人修道士によって引き起こされた騒乱によって、まずケフェリ・モスクが聖ニコラ教会から転用された。続いて、付近にあったコンスタンティノポリスの聖マリア教会も1636年には閉鎖され、1640年になるとオダラル・モスクに転換された。これらの事例は、いずれも街区のキリスト教徒（アルメニア正教会派とカトリック）とムスリムが実際に衝突したという背景が存在している点において、他のケースとは大きく趣を異にしている。

あるいは、こうした宗派間の衝突の背後には急進的なイスラーム思想で知られ、ベアーがその影響力を強調するカドゥザーデ・メフメト・エフェンディ (Kadıze Mehmed Efendi, d.1635年) と彼を信奉したカドゥザーデ派 Kadızadeliler と呼ばれる一団による社会的影響が一定程度ではあれ存在したのかもしれない。また、これらの事例との関連性は不明ながらも、上記のメフメト・エフェンディを強く支持したとされる当時の君主ムラト4世は、時にウラマーたちと激しく対立し、その結果としてウラマー層の頂点にあったシェイヒュルイスラームのアヒーザーデ・ヒュセイン・エフェンディを処刑している。ウラマーの最高位であるシェイヒュルイスラームの処刑は極めて異例であり、市井の人々はアヒーザーデ・ヒュセイン・エフェンディを「殉教者」とみなしたとされる。そして、彼によって生前にモスクに転換されていた教会は、後に「殉教者たち」を意味するシュヘダー・モスクと呼ばれたことは、すでに述べた通りである。この転用もまた、1632～34年に実施されたとされ、上記の二つの事例とほぼ同時期の出来事であることは興味深い。このため、

17世紀中葉の社会の保守化ないしは「原理主義的」なイスラーム潮流の広がりを指摘する研究も存在する⁽⁵⁶⁾。ただし、17世紀に僅かながら行われた教会のモスクへの転用に際してカドゥザーデ派による直接あるいは間接の影響があったか否かについては、同時代史料を用いてより慎重に精査する必要があるため、今後の課題としておきたい。

他方で、聖ニコラ教会がケフェリ・モスクへと転用された際に、オスマン朝政府によって代替地としてバラト地区にあった教会がアルメニア正教会派の人々に与えられている事実は、もっと注目されてもよい。すでに何度か述べたように、ある街区においてキリスト教徒が減少し反対にムスリムが増加したことによって教会がモスクへと転用された際に、キリスト教徒に対しては代わりとなる土地と古い教会が用意されていたという事例は、特定の街区の「イスラーム化」が、そのままイスタンブルという都市全体の「イスラーム化」には繋がっていなかったことを意味しよう。同じく、代替地が城壁内部に位置し、現在もギリシア正教の全地総主教座が置かれているバラト地区であったことは、オスマン朝政府が少なくとも大城壁内部の狭義のイスタンブルを「イスラーム化」しようとしていたとする別の主張に対する反証ともなるのではなかろうか。ベアーの言うイスタンブルの「イスラーム化」の根拠である市内中心部から郊外へのシナゴグとユダヤ教徒街区の移転に際しても、オズジャンやユルドゥズの反論によって、移転の対象となったユダヤ教徒たちにはオスマン朝政府によって代替地の確保や補償金の提供が行われたほか、免税措置の適用などの配慮がなされていたことがあきらかとなっている。ケフェリ・モスクの事例もまた、こうしたオスマン朝政府の政策と軌を一にするものと考えられるのである。

おわりに

本稿においては、教会やその関連施設のモスクへの転用にかかわる事例を検討し、イスタンブルの「イスラーム化」の問題について再考してきた。その結果、かりに「イスラーム化」が急速に進行した時期があるとするならば、それはいわゆる都市の「復興期」とも言うべきメフメト2世およびバイエズイト2世の治世をあわせた、わずか60年ほどの期間であったことがあきらかとなった。また、その後を訪れた「成長期」や、「成熟期」とも言い得る「長い17世紀」ではなく、その「復興期」であった15世紀後半から16世紀初頭の短い期間に教会のモスクへの転換が集中した最大の原因は、征服以前の都市には不

⁽⁵⁶⁾ 最新の研究成果を紹介した日本語で読める概説書として小笠原の著作を挙げておく（小笠原2018, 175f., 189f.）。

在であったモスクやイスラーム学院、修道場あるいはハمامといったオスマン朝が必要とする公共施設を早急に整備するためであったと考えられる。

一方で、ベアーが強調した「イスラーム化」が行われたとされる 17 世紀中頃については、同様の事例はわずか数件にとどまった。ただし、史料上で直接的な言及は確認できなかったものの、当該の時期に見られたとされるカドゥザーデ派の社会的影響力の広がりや想起させるような宗派間の衝突が、教会のモスクへの転用をめぐって少なくとも一部では起きていたことがあきらかとなったということもまた事実である。

ただし今回は、宗教的建築物の変容や移転をめぐってイスタンブルの「イスラーム化」について論じたベアーの主張を意識したことから、もっぱら教会のモスクへの転用という類似の事象に焦点を絞って議論を行った。そのため本論においては詳しく言及しなかったが、ある都市の「イスラーム化」(Islamization) という概念自体がそもそも実態として何を意味するのかという点については、別に議論していく必要がある。たとえば、オスマン朝における人口統計について研究したジェム・ベハル Cem Behar によると、征服直後の 1477/78 年にはイスタンブルの住民の約 4 割であったとされる非ムスリムの割合は、その後のオスマン朝による支配を通じて次第に増加していったという。そして、非ムスリムがイスタンブルの全人口に占める割合は、いわゆる近代的な統計資料が利用可能となったオスマン朝末期の 1885 年において、全体の 56% にも達したとされる (Behar 1996, 73)。こうしたイスタンブルの宗派別の人口分布における少なくない非ムスリムの存在や、彼らが時とともにその割合を着実に増加させていたという歴史的事実も考慮するならば、仮にいくつかの街区が「イスラーム化」したにせよ、イスタンブルという都市全体の「イスラーム化」がオスマン朝期を通じて進行していたということは果たして言い得るのだろうか。この点についてもまた、先述のカドゥザーデ派を取り巻く問題と合わせて考察していくことを今後の課題として⁽⁵⁷⁾、本稿を締めくくることとしたい。

参考文献一覧

一次史料

Hafiz Hüseyin Ayvansarayi, (Howard Crane tr.), *The Garden of the Mosques: Hafiz Hüseyin Al-Ayvansarayi's Guide to the Muslim Monuments of Ottoman Istanbul*, Leiden, 2000.

⁽⁵⁷⁾ おそらく重要な先行研究のひとつであろう (Kırımtayf 2001) は、イスタンブルにおいて英語で出版された希少な著作ということもあり、本稿では直接参照することができなかった。ただし、2012 年に作成されイスタンブルの出版社のサイトに掲載されている、おそらくは改版された著作 (Kırımtayf 2012) を参照した。

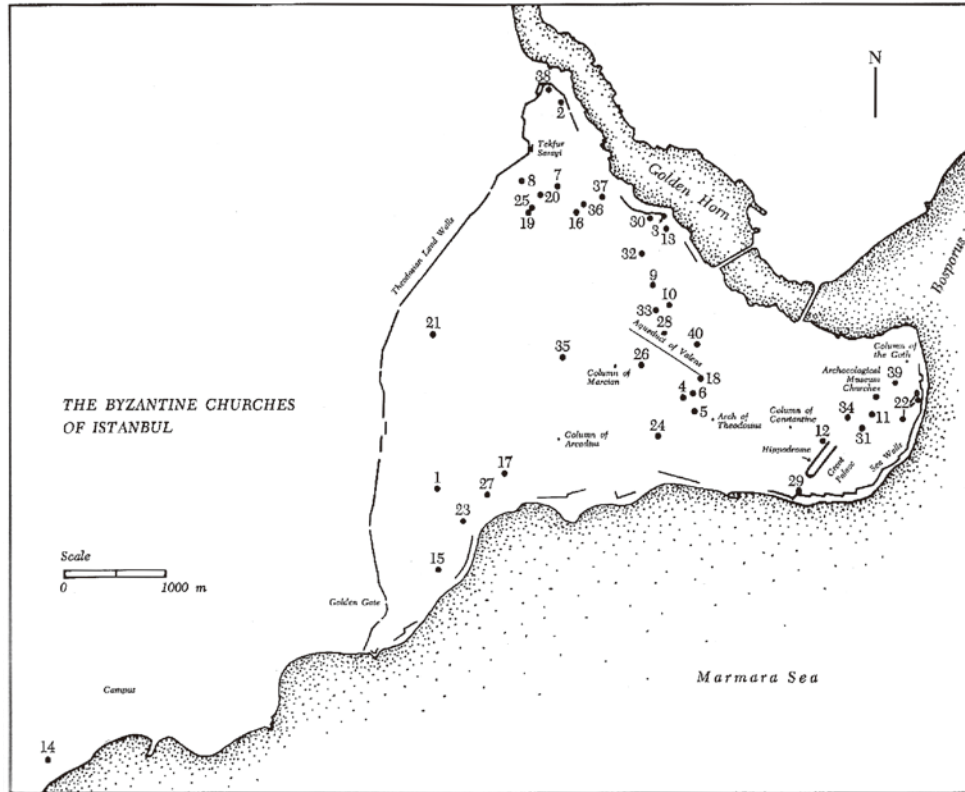
- Ayvansarayî Hüseyin Efendi, Ali Satı‘ Efendi, Süleyman Besim Efendi, *Hadikatü’l-Cevâmi’ : İstanbul Camileri ve Diğer Dîni-Sivil Mi‘mârî Yapılar*, İstanbul, 2001.
- Ömer Lutfî Barkan, Ekrem Hakki Ayverdi (eds.), *İstanbul Vakıfları Tahrir Defteri : 953 (1546) târihli*, İstanbul, 1970.
- Mehmet Canatar (ed.), *İstanbul Vakıfları Tahrir Defteri : 1009 (1600) Tarihli*, İstanbul, 2004.
- Petrus Gyllius (Erendiz Özbayoğlu, tr.), *İstanbul’un Tarihi Eserleri*, İstanbul, 1997.
- Halil İnalçık (ed.), *The Survey of Istanbul 1455 : The Text, English Translations, Analysis of the Text, Documents*, İstanbul, 2010.

研究文献

- Marc David Baer, “The Great Fire of 1660 and the Islamization of Christian and Jewish Space in Istanbul,” *International Journal of Middle East Studies*, no. 36, 2004, pp. 159–181.
- , *Honored by the Glory of Islam : Conversion and Conquest in Ottoman Europe*, Oxford, 2008.
- Cem Behar (ed.), *Osmanlı İmparatorluğu’nun ve Türkiye’nin Nüfusu 1500–1927*, vol. 2, Ankara, 1996.
- Mustafa Cezar, *Osmanlı Başkenti İstanbul*, İstanbul, 2002.
- Kazım Çeçen, *Mimar Sinan ve Kırkçeşme Tesisleri*, İstanbul, 1988.
- Semavi Eyice, “İstanbul’da Kiliseden Çevirilmiş Cami ve Mescidler ve Bunların Restrasyonu,” *Vakıf Haftası Dergisi*, no. 7, 1990, pp. 271–191.
- , “Arap Camii,” *Diyanet İslam Ansiklopedisi* (以下, *DİA* と略記), cilt.3, 1991, pp. 326f.
- , “Acem Ağa Mescidi,” *Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedisi* (以下, *DBİA* と略記), cilt.1, İstanbul, 1994 (a), pp. 60f.
- , “Arabacı Bayezid Mescidi,” *DBİA*, cilt.1, İstanbul, 1994 (b), p. 287.
- , “Atik Mustafa Paşa Camii,” *DBİA*, cilt.1, İstanbul, 1994 (c), pp. 406f.
- , “Ayasofya,” *DBİA*, cilt.1, İstanbul, 1994 (d), pp. 447–451.
- , “Balaban Ağa Mescidi,” *DBİA*, cilt.2, İstanbul, 1994 (e), pp. 9f.
- , “Bodrum Camii,” *DBİA*, cilt.2, İstanbul, 1994 (f), pp. 263f.
- , “Eski İmaret Camii,” *DBİA*, cilt.3, İstanbul, 1994 (g), p. 203.
- , “Fenari İsa Camii,” *DBİA*, cilt.3, İstanbul, 1994 (h), pp. 277f.
- , “Fethiye Camii,” *DBİA*, cilt.3, İstanbul, 1994 (i), pp. 300f.
- , “Gül Camii,” *DBİA*, cilt.3, İstanbul, 1994 (j), pp. 434f.
- , “Kariye Camii,” *DBİA*, cilt.4, İstanbul, 1994 (k), pp. 466–469.
- , “Kasım Ağa Camii,” *DBİA*, cilt.4, İstanbul, 1994 (l), pp. 479f.
- , “Kefeli Camii,” *DBİA*, cilt.4, İstanbul, 1994 (m), pp. 517f.
- , “Küçük Ayasofya Camii,” *DBİA*, cilt.5, İstanbul, 1994 (n), pp. 146–148.
- , “Manastır Mescidi,” *DBİA*, cilt.5, İstanbul, 1994 (o), pp. 287f.
- , “Odalar Camii,” *DBİA*, cilt.6, İstanbul, 1994 (p), pp. 120f.
- , “Parmakkapı Mescidi,” *DBİA*, cilt.6, İstanbul, 1994 (q), pp. 225f.
- , “Sekbanbaşı Ferhad Ağa Mescidi,” *DBİA*, cilt.6, İstanbul, 1994 (r), pp. 489.
- , “Sekbanbaşı İbrahim Ağa Mescidi,” *DBİA*, cilt.6, İstanbul, 1994 (s), pp. 489f.
- , “Sinan Paşa Mescidi,” *DBİA*, cilt.7, İstanbul, 1994 (t), p. 5.
- , “Şeyh Murad Mescidi,” *DBİA*, cilt.7, İstanbul, 1994 (u), pp. 168f.
- , “Şeyh Süleyman Mescidi,” *DBİA*, cilt.7, İstanbul, 1994 (v), p. 172.

- , “Şüheda Mescidi,” *DBİA*, cilt.7, İstanbul, 1994 (w), p. 188.
- , “Toklu Dede Mescidi,” *DBİA*, cilt.7, İstanbul, 1994 (x), pp. 272-274.
- , “Vefa Kilise Camii,” *DBİA*, cilt.7, İstanbul, 1994 (y), pp. 373-375.
- , “Zeyrek Kilise Camii,” *DBİA*, cilt.7, İstanbul, 1994 (z), pp. 555-557.
- , “Hüseyin Ayvansarayı,” *DİA*, cilt.18, İstanbul, 1998, pp. 528-530.
- Semavi Eyice, M.Baha Tanman, “Koca Mustafa Paşa Camii,” *DBİA*, cilt.5, İstanbul, 1994 (a), pp. 30-34.
- , “Sancakdar Hayreddin Mescidi ve Tekkesi,” *DBİA*, cilt.6, İstanbul, 1994 (b), pp. 448f.
- Ekrem Işın, “Yavsi Baba Tekkesi,” *DBİA*, cilt.7, İstanbul, 1994, pp. 445f.
- Halil İnalçık, “İstanbul : An Islamic City,” *Journal of Islamic Studies*, vol.1, 1990, pp. 1-23.
- Hedda Reindl Kiel, “Mesih Paşa,” *DİA*, cilt.28, İstanbul, 2004, pp. 309f.
- Süleyman Kırımtayif, *Converted Byzantine Churches in İstanbul : Their Transformation into Mosques and Masjids*, İstanbul, 2001.
- , *Byzantine Churches in İstanbul : Their Transformation into Mosques or Masjids*, İstanbul, 2012.
(<http://suleymankirimtayif.com/pdf/ByzantineChurchesinIstanbul.pdf> 2019年1月20日確認)
- Doğan Kuban, “Kalenderhane Camii,” *DBİA*, cilt.4, İstanbul, 1994, pp. 396-398.
- Thomas F. Mathews, *The Byzantine Churches of İstanbul : A Photographic Survey*, University Park, 1976.
- Abdülkadir Özcan, “Ali Paşa, Arabacı,” *DİA*, cilt.2, İstanbul, 1989, p. 424.
- , “İstanbul’un Eminönü Semti XVII. Yüzyılda mı İslamlaştırıldı?,” *Osmanlı Araştırmaları*, no. 37, 2011, pp. 206-213.
- Kazuaki Sawai, “The 1509 İstanbul Earthquake and Subsequent Recovery,” *Mediterranean World*, no. 22, 2015, pp. 29-42.
- M.Baha Tanman, “Ayasofya,” *DBİA*, cilt.1, İstanbul, 1994 (a), pp. 448-458.
- , “Mırza Baba Tekkesi,” *DBİA*, cilt.5, İstanbul, 1994 (b), pp. 474f.
- , “Yıldız Dede Tekkesi,” *DBİA*, cilt.7, İstanbul, 1994 (c), pp. 516f.
- Wolfgang Müller-Wiener (Ülker Sayın tr.), *İstanbul’un Tarihsel Topografyası*, İstanbul, 1998.
- Kenan Yıldız, “1660 İstanbul Yangınının Sosyo-Ekonomik Tahlili,” *Doktora tezi*, Marmara Üniversitesi, İstanbul, 2012.
- , “Doğruluğu Tartışmalı Bir Tartışma : 1660 Yangını İstanbul’un İslâmlaşmasına Etki Etti mi?,” *Osmanlı İstanbulu I*, İstanbul, 2014, pp. 197-242.
- , *1660 İstanbul Yangını ve Etkileri : Vakıflar, Toplum ve Ekonomi*, Ankara, 2017.
- Erdem Yücel, “Aya İrini Kilisesi,” *DBİA*, cilt.1, İstanbul, 1994, pp. 433-435.
- 小笠原弘幸『オスマン帝国—繁栄と衰亡の600年史—』中央公論新社, 2018年
- 澤井一彰, 「1509年のイスタンブル大地震とその後の復興—「この世の終わり」と呼ばれた大震災—」, 『歴史学研究』No. 898, 2012年, pp. 154-162.
- , 『オスマン朝の食糧危機と穀物供給—16世紀後半の「東地中海世界」—』山川出版社, 2015年
- , 「1660年のイスタンブル大火とユダヤ教徒コミュニティ」『桜文論叢』96, 2018年, pp. 271-296.
- 羽田正「モスク」大塚和夫他(編)『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 2002年, pp. 1002-1005.
- 宮下遼『多元性の都市イスタンブル—近世オスマン帝都の都市空間と詩人, 庶民, 異邦人—』大阪大学出版会, 2018年

地図 イスタンブルにおけるビザンツ教会の分布 (Mathews 1976)



- | | |
|-------------------------------|-------------------------|
| 1 コジャ・ムスタファ・パシヤ・モスク | 21 マナストウル・モスク |
| 2 アテイク・ムスタファ・パシヤ・モスク | 22 マンガナ教会※ |
| 3 アイカブ教会※ | 23 アヤ・メナス教会※ |
| 4 パラバン・アー・モスク | 24 ボドルム・モスク |
| 5 バヤズィト地区の教会群※ | 25 オダラル・モスク |
| 6 同※ | 26 アヤ・ポルイェウクトス教会(?) ※ |
| 7 ボーダン宮殿※ | 27 サンジャクタール・ハイレットイン・モスク |
| 8 カーリエ・モスク | 28 セクバンバシュ・イブラヒム・アー・モスク |
| 9 エスキ・イマーレト・モスク | 29 キュチュック・アヤソフィア・モスク |
| 10 ゼイレク・キリセ・モスク | 30 スイナン・パシヤ・モスク |
| 11 アヤ・イリニ教会※ | 31 アヤソフィア |
| 12 エウフェミア教会※ | 32 シェイフ・ムラト・モスク |
| 13 ギュル・モスク | 33 シェイフ・スレイマン・モスク |
| 14 洗礼者聖ヨハネ教会※ | 34 アジェム・アー・モスク |
| 15 イムラホル・イルヤス・ベイ・モスク | 35 フェナーリー・イーサー・モスク |
| 16 フラーミー・アフメト・パシヤ・モスク | 36 フェティエ・モスク |
| 17 マナストウル・モスク (イブラヒム・パシヤ・モスク) | 37 カンル・キリセ教会※ |
| 18 カレンデルハーネ・モスク | 38 トクル・デデ・モスク |
| 19 カスム・アー・モスク | 39 トプカプ宮殿バシリカ※ |
| 20 ケフェリ・モスク | 40 ヴェファー・キリセ・モスク |

※モスク等に転用されなかったため、本稿では考察の対象としていない。

